

---

# 紅き翼～乙女だらけの大戦争～

神代ふみあき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅き翼〜乙女だらけの大戦争〜

### 【Nコード】

N0393M

### 【作者名】

神代ふみあき

### 【あらすじ】

魔法先生 ネギま！ の大戦時期を題材にした、紅き翼のSSです。

ただし、オリジナル主人公以外TSとなっています。あと事件の流れや内容が原作を大きく無視している点が多いので、お嫌いな方は読まないほうがいいかもしれません。

ご要望もあり「ネギま」本編時代に突入しましたが、どこまでやるかは未定です。

一応、魔法世界に行ってラカンへ弟子入りするぐらいまでは視野に入れていきます。

## 第一話 旧世界（前書き）

主人公：アイナⅡ シュトルムシュルト（男）

ヒロイン：ナギⅡ スプリングフィールド（女）

そんなところから始まります

## 第一話 旧世界

くアイナ

退屈な授業を終えると、もう夕方だった。

このところ授業妨害が多くて、毎日夕方まで授業がある。

もちろん、勉強になるのはいいんだけど、どうも進捗というか何というか、個人個人で資料館にでもこもった方が早息がするのは気のせいかな、と思う。

そんなわけで、日々妖精の目をかいくぐって図書エリアに進入して自習してるんだけど、先日見つかってしまった。

学園長のまえに引き出されたとき、実は一人ではなかった。

隣にたたされたのは、ナギィスプリングフィールド。

学園一番の問題児にして暴力女。

有り余る体力と無限の魔力で向かうところ敵なしという無双を地でいく体力バカ。

あれだけ魔力があれば、魔法だってすごいはずなのに、構成はしないし呪文も覚ええないという不勉強ぶりはもつたいなさすぎる。

で、なんで僕がここまで彼女について詳しいかというところ、その、ほら……。

「おっぱいがおおきいからです」

彼女は年齢に見合わぬ胸をしていて、これから先いかなる進化があっても拳丹生になることが約束されている「約束された勝利の胸」なのです。

おっぱい星人として見過ごせない存在なのです。

その胸はすでに教員を含めた学園一、村の中でもトップクラス。

星人仲間でも話題に上る強者なのです。

あそこまでの強者になると、性格がどうしたとか素行がどうか趣味がなんだという些末な問題は関係なくなります。

僕の密かな目標は、あのおっぱいを自分好みに成長させ揉みだくこと。

星人集会でそう発表したところ、「マイスター」の称号を得ました。

学園長室での出会いからこっち、彼女には最良の食材を与えつつ、その成長を管理するのでした。

くナギ

アイナってな優等生は、むちゃくちゃ変な奴だった。

はじめは教師から言われて面倒をみようとしていたのかと思いきや、授業放棄の時も乱闘の時も、ぴったりついてきやがる。

はらへっやなーとか、ちょっとイライラすなーなんてときには必ず飴だの何だのを取り出しては餌付けする事を繰り返し、今ではあいつは作ってくる弁当すら待ち遠しくなってしまうた。

バカをやる仲間からは「完全に胃袋を捕まれましたね」なんて言われたけれど、実のところそうい気にはなってる。

アイナってな男は、男とは思えないほど可憐な容姿をしていて、名前も伴い女扱いされることも少なくない。

それでもアイツがいじめられないのは、成績が優秀で飛び級の話すらアルほどの優等生だからだ。

さすがに成績が悪い奴らは絡めないし、いい奴でも追いつけない

から。

そんなアイツが何でアタシなんか絡むのか解らなかったけど、でも悪い気はしなかった。

アタシの隣にアイツが行る、それだけで誰にも負けたくない、そんな気持ちになっていた。

「アイナ

集会場で全会決議が行われる。

僕が集会を引退しなければならなかったからだ。

集会「30S（おっぱいによるおっぱいのためのおっぱい星人）会」名誉会長である僕が、この場を去らなくなってしまったわけと言え、ナギについて行くためだった。

始まりは学園内の教師との口論だったけど、「呪文一つ覚えられない奴が大きな顔をするな」という一言が彼女に火をつけたのだった。

速攻で学園を退学することを決め、僕についてきてほしい胸の相談があったのだ。

僕はその場で了承したけど、それでも村の仲間一言言っている。

はじめは30S全体で脱会否決が起きたんだけど、「僕は、彼女を守り抜くんだ、命にかけても！」という熱弁で了解を得られた。今までの運動や会議の引継を終えて待ち合わせ場所に行くと、なぜか真っ赤になったナギがいた。

「どうしたの？」

「……なんでもねーよ。それより、はやくいこうぜー！」

きゅっと腕にぶらさがれ、彼女の成長を理解する。

・・・確認中

よし、順調！



## 第一話 旧世界（後書き）

思いついた瞬間に書き始めていました。

やらなければ良かったかと思いましたが、書き終えてみればすっきりしました。w

## 第二話 魔法世界

くナギ

爺の知り合いという爺の勧めで、短期留学生として日本の学校にきた。

世界一周の旅で色々経験した私たちは、すでに学園側でも認めざる得ない実績を上げているといえる。

でも、巡り巡って解ったことは、この世界の騒動の本質的な大本は、この世界にないと言うこと。

魔法世界という異世界から持ち込まれるバカ騒ぎを何とかしないとけないと言う結論に達した。

だから私はアイナに相談した。

「・・・一緒に魔法世界に行ってくれねーか？」

アタシは卑怯だ。

アイナがあの日に行った言葉を知っているのに、何度も何度も試すようなことを行っているのだから。

今も忘れない、何年たつても忘れないだろう。

村をでるあの日、あいつが面倒をみていた青年会に話を通しに行ったときのこと。

あふれる人望や将来性のおかげか、あいつは当時青年会の会長で、みんなに頼りにされていた。

そのアイナが会をやめてアタシについて行くと言ったとき、多くの人間が反対した。罵倒した。

それでもアイツは、アイナは、

「僕は、彼女を守り抜くんだ、命にかけても！」

そんなことを叫んだ。

いくら鈍いアタシでも理解できる。

アイツの心を、想いを。

でも意気地がないアタシは、アイツをいつも試すようなことを言う。試すようなことをする。

行動を問いかける、決意を問いかける。

同じ部屋に泊まって自制心を試したり、戦いの前で戻るように強要したり。

そのたびにアイナはアタシの隣を選んでくれる。

アタシを汚さぬように振る舞ってくれる。

アタシの思いが曲がらないように考えてくれる。

そんなアイツにまた問いかけた。

「……一緒に魔法世界に行ってくれねーか？」

なんて卑怯で意気地がなくて。

それでもアイツが笑顔で頷いてくれるはずだと期待しているアタシがいるのがいやだった。

く  
アイナ

真帆螺での学生生活は、今までにないほどの充実であり、今までいかに視野が狭かったかを思い知ることになった。

おっぱいは大きければ良い訳じゃなかった。

大きいのもよし、小さいのもよし、中ぐらいのもよし。  
発展途上にあるものも惜しくも成長をやめてしまったものも、味わい深く麗しいものだった。

世界を巡った経験から纏めた「世界胸部見聞録」を3OSに送ったところ、二代目会長が全世界に広げた3OSの情報網に飛び火して、全世界大会をイギリスで開催することになったとか。

二年おきに各支部持ち回りで全世界大会をするときいたときには胸が熱くなった。

この世界のおっぱい星人の心を一つにできた、と。

そんなとき、ナギから一つの可能性が示された。

「……一緒に魔法世界に行ってくれねーか？」

衝撃だった。

そう、まだ全世界じゃなかったんだ、と。  
僕は一も二もなく頷いてナギにほほえむ。

「君の隣にいる、そう誓っただら？」

涙を潤ませて僕を抱きしめるナギ。

・・・確認。

よし、良い成長だ！

くナギ

魔法世界にわたってきて、突然戦争に巻き込まれた。

ヘラス帝国と小国の戦争で、知らぬ間に魔法兵として巻き込まれていた。

小隊に二人で配属されたけど、員数外のお手伝いとしての配属だった。

何度も違つとアイナは説明したが、戦況が許さず流されるままに転戦していった。

私の魔力の大きさは直ぐに知れて前線にでることになり、アイナはアイナで小隊の資材とりまとめや支援要求などで大いに活躍し、二人とも小隊の中核になっていた。

そんな生活の中、やっとこさワタシらが旧世界からの旅行者で、軍とはなにも関係ない存在だったことが軍内部に知れ渡った。

帝国との休戦協定のさなかのことで、ヘラス帝国から敵兵ながらアップレ、ということと招待されたときに判明したことだった。小国の軍上層部も寝耳に水だったらしく、大いに騒ぎとなった。そのおかげか、年少ながら前線で小国を救った「傭兵」として名を広めることになった。

まあ、なんだ。せめて傭兵だった、ということにしないと、いくら戦争の混乱とはいえ一般の旅行者を徴兵シタとあっては両国の面目に関わるとか。

十二分に報酬はもらったし、色々修行にもなったので、ワタシはよしとしたが、アイナは色々と交渉したようだ。

帝国にも小国にも村の青年団のような組織を作って、相互互助ができるようにしようと言うものらしい。

さすがは優等生。

戦争状態になりにくいようにと布石を打っている。

先の先まで読むアイナ。

やはり隣にいてくれると有り難い。

く  
アイナ

戦場を巡る中で、ナギの胸を崇拜する支持者を増やすことができた。

敵味方共に「神胸ナギ」として名をとどろかせている中で、停戦となったのでこれ幸いと両軍に信派を広めた。

やはり真理は浸透するもので、両国併せて数万の同士を得られた。同士集会の折「世界胸部見聞録」を発表したところ爆発的な反響を呼び、誰しもが旧世界にあこがれた。

でも、違う違うんだ、そうじゃないんだ！

旧世界には旧世界の「おっぱい」があるが、魔法世界には魔法世界の「おっぱい」がある。

君たちは極めたのか？ その先にあるものを見据えたのか？ 我々はこの世界の「おっぱい」すら極めていないじゃないか！

僕の熱弁に会場は爆発した。

そう、我らは魔法世界の「おっぱい」を極めんとする探求者だ、と。

以降、魔法世界の3OSは「MOS」(魔法世界のおっぱいを探査するものたち)と名乗り、活発な活動を開始することになった。

また、今回の戦争に巻き込まれたことで「傭兵」としての立場を手に入れたので、戦場を渡り歩きながら信派を増やそうと決心した。

「すまないな、アイナ。おまえには危険な目ばかり合わせる。」

「何度でも言うけどね、ナギ。僕はきみととものあるんだよ？」

ちよつと瞳を潤ませたナギを抱き寄せた。

・・・確認。

・・・！ しばらく食事制限しないといけないかも？

### 第三話 新たなる仲間

くナギ

戦争を渡り歩き、戦鬪を治め、けが人たちを助けているうちに仲間ができた。

年齢詐称薬で幼児の姿になったときにワタシをさらおうとした女、アルビオンⅡイマ。

同じく、幼児のアイナをさらおうとした女、JⅡラカン。

見た目は幼女、中身は三桁才の師匠、フィリウスⅡゼクト。

胸は控えめ剣技は超一流の戦鬪巫女、永峻。

見た目は屈強な女鬼教官、中身はかわいい男の子大好きのカトウⅡカグラⅡヴァンテグとその弟子美少女タカミチ。

そしてチームの緑一点（黒一点と前にいったら「緑の方が知的ですよ」といわれた。よくわからん）、アイナⅡシュトルムシュルト。

共に旅を始め、共に生き抜いたワタシの片腕。

どうやら永峻がアイナを狙っているらしいけど、うまくは行かないだろう。

なにしろアイナは、その、ワタシのような大きな胸が好きらしいから。

先日荷物の中から、ワタシの胸から上の写真がでてきたので間違いないだろう。

それも何枚も。

言ってくれば隠し撮りなんかしなくても……。

……



ワタシらの傭兵団は今「紅き翼」として有名になっている。  
向かうところ敵なし、不敗にして必勝。

そんなワタシらが対ヘラス帝国戦、グレートブリッジ陥落作戦に  
呼ばれたのは必然だった。

しかしワタシは気づいていなかった。

あの女の存在を。

く  
アイナ

お姫様、アリカ姫は、周囲に信用できる人間がおらず誰も信用が  
できないと言う心身状態だった。

化粧品でごまかしてはいるけど、顔色は悪く健康とは言いがたかつ  
た。

そんな状態ではおっぱいなどいい状態ではなく、「悪胸レベル4」  
という単なる脂肪一歩手前の状態だった。

これはまずい、と言うことで、姫の配下にいた同志を募り彼女の  
胸の健康を戻すため仕掛けることにした。

「……アイナ、あれはなんじゃ？」

「串焼き。食べてみる？」

「……うむ。」

下の町まで連れ出して、立ち食いしたり、飲み屋には行ったり、  
町中で歌ったり踊ったり。

最後に港までつれてきた。

「……今日は楽しかったぞ、アイナ」シュトルムシュルト」

感謝を、と苦笑いの彼女をみてチョップ。

「・・・な、王族に手を挙げるなぞ・・・。」

「バカ言わないの。ストレス解消？気晴らし？王族がそんな遊びに時間をかけられるはずがないでしょ？」

「・・・!!」

「今日みてもらったのは、真に君が守るべきものをみてもらうためだよ」

「・・・。」

「君の敵は敵国でも根暗な貴族でもないんだ。」

「・・・。」

「国民をみることでできない王族。国民を知らない王族。これって一番の害悪だと思わない？」

うつむき、両手に力を込めるアリカ姫だったが、視線をあげたときには強い力のある目になっていた。

「アイナ＝シュトルムシュルト。ソナタに感謝を。」

取り違えようのない感謝に僕はほほえむ。

「君にはこの国の平和おっばいを支える力と意志がある。それを忘れないでいてくれればうれしい。」

「・・・この日、この時、この夕日に誓おう。ワタシは民たちのために生き抜くと!!」

彼女が拳をあげると、周囲が燃えた。

市民に化けた兵が、密かに護衛していた兵が、そして彼女と知りながら彼女の休日を見守っていた国民たちが、彼女の決意に心打たれたのだ。

「これは、誓いの証、だ。」

腕に身を押しつけつつ、頬をついばまれて紅くなる僕だった。

・・・確認。

・・・状態回復を確認！！！！  
・・・今後が大いに期待！！！！

## 第四話 逃亡

くナギ

メガロメセブンティアにアリカ姫が拘留されたという情報が入ったのは、ワタシらがいつの間にかお尋ね者になって久しくのことだった。

まあ色々とあつたし、アイナに色目を使ってくるところは気に入らないけど、そんな風に居なくなられるのは困るから、そんな風に説明すると、アイナはにっこりとほほえむ。

「ナギ、お友達を助けいくのに良い訳はいらないんだよ？」

あのころから変わらないかわいい笑顔で言うのは反則だ。最近ラカンですら「あの年齢から育てるのもありかも知れない」とかいいはじめているし……。

とはいえ、ゼクト師匠に言われるまでもなく、これは見え見えの罠だろう。

MM元老員や帝国貴族の背後にいる「謎の組織」を調べだした途端に犯罪者として追われ始めたのだから。

今回も紅き翼に関連深い人質を準備して、双方を始末つけようと言っあたりがせこいせこい。

むろん罠なぞ喰い破るまで、だ。

くアリカ

何というバカたちだろう。

正面突破などと言う言葉が生やさしい程の勢いで拘置所を全損させた「紅き翼」は、一緒に拘留されていたヘラス帝国第三王女テオドラ王女までも連れ出した。

追撃にきた手勢も返り討ちにし、細かな転移を繰り返してアジトまで昼間のうちに移動するという大胆な行為をやりとげた。

正直に言うと、この救出作戦に、彼が居なかったことを残念に思う気持ちと安心した気持ちがある。

彼は「紅き翼」において参謀的な役割で、作戦の実施寸前までと作戦後の撤収が主な仕事だった。

だから、直接作戦に関わることは少ないし、あの場になかったのは正しいといえる。

でも、少しだけ妄想していたのは事実だ。

「またせたな。」

あの台詞を、かれが、アイナ＝シュトルムシュルトが言ってくれるのを。

・・・って、なんて恥ずかしいんだ、ワタシは。

くナギ

アジトに到着すると、テオドラことテオが「ぼろ」「だの」「あばらや」だのとアジトをこけにする。

ま、中身を見てからだ、というよ、

「外見があれだけぼろで、中身が伴うはずがないのじゃ！」

と言い切ったテオだったが、驚きで目を丸くしていた。そりゃそうだ。

アイナが三日もかけて整えたんだから。犯罪者として追われる前など、どこぞの高級ホテルだって社員研修でアイナへ弟子入りしにきたぐらいだ。

胸を張って説明するアタシの横を抜け、アリカが走る。

「・・・アイナ!!」

につこりほえんでいたアイナに飛びつくと、声もなく鳴き声を上げた。

「・・・」

そんなアリカを撫でながら、アイナハささやくように語る。

「民たちと共にあり民たちと共に歩むアリカ姫、評判があり実際の伴い、そんなあなたを国民が悪く思うはずがありません。自信を持って胸を張ってください、あなたはあなたが思う王族ですよ?」

泣き顔のまま頬をゆるめるアリカの頬を、ハンカチで拭うアイナ。

「少しやせましたか?」

「ふ、慣れぬ政務と監獄暮らしが堪えただけだ。」

「ソナタは贅沢すぎなんじゃ。メシが不味いと、ずっと食わなんだけじゃろ?」

「・・・ヘラスの第三王女。ソナタはうまい飯を食ったことがないから平気なのだ。」

「そつでもないじゃろ?」

「・・・アイナ、すまぬが一食作ってやってくれ」

そんなこんなでアイナがメシを作って出すと、瞬間的に食べ終えるテオ。

「・・・すまんんだ、アリカ姫よ。われの見識が狭かったのじゃ。」  
「わかりあえると思っておりました、テオドラ王女よ」

さわやかな笑みで握手をする二人だったが、瞬間的に顔を寄せあう。

「して、両国の友好の証とってはなんだが、アイナを帝国に・・・」  
「バカを言うな、ロリ王女。アイナを渡せるはずもなかるう。」  
「・・・おいおいおい、まてまてまて、アイナはアタシんだろ？  
ああ？」

「おまちなさい。アイナさんは私と神社を継ぐという夢を分かちあう・・・」  
「おもしれえ、このラカンのアイナ愛育計画をじゃまするんだな？」  
「・・・ふふふ、我が野望の前では、ゴミみたいな夢ですね・・・  
アイナさんをTSして、ユリユリするというワタシの野望の前では・・・。」

瞬間にしてアジト倒壊。

魔力で行方を知ったメガロメセブンティア軍が大集合するも返り討ち。

半径20kmを更地にしたところで周辺にアイナが居ないことに気づく紅き翼達。

『探さないでください』

押し隠していた仲間の欲望を前にして、逃亡を図るアイナであっ

た。

くアイナ

僕はだめな男だ。

命を懸けて守ると言った「おっぱい」から逃げ出したのだから。少なくとも、一生をかけて成長させてきた「おっぱい」よりも自分の命を惜しんだといつても過言じゃない。

僕の決意なんて、こんなものなんだろうか？

30Sの頃から始まった僕の旅の中で、常に気を配り、愛を与え、温もりを伝えてきたナギの「おっぱい」。

少し手を抜いただけで黄金の輝きを失う千金に値する「おっぱい」。

あのオツパイから逃げ出して僕になにが残るんだろう？

寝ても覚めても「おっぱい」を思う毎日。

もちろん、周辺にもオツパイはある。

でも、それはナギの「おっぱい」があつてこそ、そういうものだと言つことに気づいた。

僕は忘れていた。ナギのおっぱいこそ一番忘れてはいけないおっぱいだと言つたことを。

僕は悟った。ナギのおっぱいこそ今一番必要だと。

逃げ出すのではなく、立ち向かわねばならなかったんだと。

善は急げ、と立ち上がる。

道ばたに座り込んでいた僕の鼻先が、「触れた」。



この肌触り、  
この汗のにおい、  
この温もり……。

「……ナ、ギ……？」

「おめー、アタシのそばを離れねーんじゃなかったのかよ？」

不機嫌そうなナギの声。

「……うん、うん、そうなんだ、ごめん」

「いや、わかってるんだよ。悪いのはアタシらだ。」

僕を抱きしめるナギ。

再びこの感触を得られたことに、僕はうれしくて泣いた。

「……ナギ、ナギ。再び誓うよ、ずっと居るよ、だから……」

「今度逃げ出したら、世界の彼方にいても引つ張り込むからな！」

そっぴいなながら僕にキスをする。

弾ける光、巡る呪文、あふれる魔法。

この時初めて僕は、ナギとキスをした。

体中がとろけて、ナギと一緒にになったかのような感覚の中、僕は「仮契約」をした。

## 第五話 アーティファクト

永峻

初めてであった頃から年齢を感じさせない美少年であったアイナ  
「シュトルムシュルトが、紅き翼のリーダーであるナギ」スプリ  
ングフィールドと仮契約したのは、三日ほど前のことでした。

先日の痴話喧嘩の折、嫌気をさして逃亡したアイナくんでしたが、  
一ヶ月ほどの逃亡で捕捉することに成功しました。

その際、逃げられぬようにと誰が仮契約するかもめましたが、  
ジャンケンで勝ったナギが仮契約をすませました。

その時に何があったかはしりませんが、以降、アイナ君は甲斐甲  
斐しくナギの世話を焼いている気がします。

「あやしいのじゃ」とテオ。

「・・・気に入らぬ」とアリカ王女

「・・・やっぱ、ワタシと契約すべきだったな」とラカン。

その他もぐちぐちしている。

もちろん、今まで道理、今まで以上に私たちの世話も焼いてくれ  
るのだが、その一番にナギが居る気がしてならない。

単なる焼き餅なのはわかっていますが、女である以上、避けられ  
ない心の動きだと理解してほしいのだよ、アイナ君。

「ところでアイナ君のアーティファクトって、どんなのがでたんで  
しょう?」

急に興味がでたとばかりにアイナ君を取り囲むと、彼はにこやかに  
教えてくれた。

その名も「千里万里を見通す目」。  
自分を中心に、半径2000kmの任意の場所の視覚情報とそこに  
いるという实在感覚を得られるというもの。

「……アイナ君？それは貸し借りできるものですか？」

アルの言葉にアイナ君がうなづくと、彼女は凶器の色合いで使わ  
せてほしいと言い出した。

「アデアット」

彼の言葉とともに現れたのは顔半分を覆うかのようなサングラス  
だった。

彼がアルに取り付け、想定座標を意識。

はん、と手をたたいた瞬間、アルが鼻血を吹いて倒れた。

何が起きたかはわからないが、起きあがったアルは彼を抱きしめ  
た。

「すばらしいアーティファクトです！！神をも越える！！」

よくわかりませんが邪だと判断してアルを「落し」ました。

くアリカ

それは恐ろしいアーティファクトだった。

誰にも存在を気づかれることもなくリアルタイムで情報を入手し、その場にいる感覚がリアルすぎて、中級魔法レベルまでなら実現可能という異常さ。

これにより敵性情報の多くを押さえることに成功した。

さらには政府を裏切って「秘密結社」に荷担する貴族や役人を片っ端から再起不能にし続けたことから、「姿なき英雄」という新たな存在が「赤き翼」に加わったという噂まで流れた。

実際、それは恐ろしいまでの事実に近い噂だった。

アイナのアーティファクトを装着したナギが、魔法で汚職軍部をナギ払う。

アイナのアーティファクトを装着したラカンが、違法併記を準備していた貴族屋敷をナギ払う。

アイナのアーティファクトを装着したアルが、軍情報部から得た情報を攪乱する。

今まで直接戦闘が多かった赤き翼であったが、その一時期だけは「秘密結社」のあぶり出しに専念した。

その甲斐あつてか、正常な軍部や情報部からの連絡がはいる。

それは「秘密結社」いや、「完全なる世界」への挟撃作戦への参加を促すものだった。

「アタシは参加すべきだと思つ」

アイナの頬を撫でながらナギはいう。

アイナはアーティファクトの過剰使用による疲労で倒れたが、時期に回復するだろうとのゼクト老の話だった。

こんなにもアーティファクトを使わねばならないほど魔法世界は「完全なる世界」に汚染されていたのだ。

しかし、決戦当日となれば「姿なき英雄」の出番はない。

その日は我が国の旗艦に私とともに乗る事になった。

「ほんとはな、いつでも隣にいてほしんだけどな」

ナギはその時初めて女の顔になったとワタシは感じた。

「アリカ、アタシ等が居ないからって寝込みをおそうなよ？」

「王族をなめるな。」

そうさ、アイナの一人や二人、正面から奪い取っみせるさー!!

く  
アイナ

意識はあるのに体が動かない。

金縛りというよりも体を動かす神経が切れている感じ。

とはいえ、ナギが僕の頬w撫でているのがわかる。

何年もかけて育てただけあって、僕好みの「神胸」だ。

そしてアーティファクトの影響か、周りの人たちの胸もわかる。

アリカ姫は元々よかつたけど、最近光輝くような胸になったし、

ラカンが形を整えるというよりも、堅さを何とかする方にアレンジしていったら、いいかんじ。

えいしゅんは言うほど小さくないよね？　というか日本人の平均以上だしかわいいと思うよ？

アル、はぜんぜん変わらない。手を入れても入れなくても変わらなくて悔しい。僕色に変えたいのに。

ガトウさんもいい感じですよ。むっちゃくちゃかたいファンデーションをやめて、ふっくらするぐらいのファンデーションに全部変えてしまいましたから。絶対にあうのに、なんでたまにしかつてくれないかな？

あ、そうそう、タカミチ。そろそろ二次成長の加速時期なのに、いい食材が準備できないんだよねー、はやく何とかしないと栄養不足になってしまう。主に胸の。

最近入ってきたクルトちゃんは、なんというか、残念な感じの女の子。というか、いかにがんばっても胸の成長が見込めないと、僕の目が叫んでいる。でも、本人は隠れてバストアップ体操とかしているのが不憫。無理なんだ、ぜんぜん無理なんだ。

・・・あー、でも、うれしいなあ。

ナギについてきたら、世界中のおっぱいに出会って、最高のおっぱいを育てられて、最高の幸せだなー。

粹に頬に何かがさわる感じ。

柔らかな、しっとりとした・・・。

いくつもいくつも・・・。

あーしあわせだなあー。

## 第六話 乙女だらけの大戦争

くテオドラ

本国に戻る前に、私はアイナの頬にキスをした。

紅き翼のみんながしているからって事もあるけど、私も私でアイナが大好きだったから。

初めてであったときは、なんてふがい無い男なんだろう、と思った。

美しくも強い女たちが自分を求めていると知れば、調子に乗ることとはあっても逃げ出すなんてもつてのほかだ、と。

が、ナギ達とともに旅する間で、それがいかに恐ろしいことなのかを知った。

まさに血で血を洗う暗闘が、表の生活の裏で行われていたのだ。

一応、アイナに隠れてやっていることになっているのだが、私の横でお茶を入れてるアイナはしっていた。

「知っていて止めぬのか？」

「・・・ええ。」

アイナ自身に知られたくないと思っている彼女たちの気持ちを大事にしたいと言っていた。

私と一緒にいるときのアイナは、長命族の私を子供扱いしなかった。

大人とも扱ってくれなかったが、幼児を相手にするかのような態度をとることはなかった。

それは新鮮でうれしくて、たまらないことで。

「アイナ。なんでわらわを子供扱いせぬのじゃ？」  
「テオ。君は王族としての立場と仕事をしている立派な社会構成員だと想ってますよ？ だからですよ。」

私は、声を立てずに泣いた。

アイナにすがりつき泣いた。

私はこんなにも理解されたのは初めてだったから。

私は、わかってしまった。

だから女達はアイナを求めているのだ、と。

私もアイナに心を捕まれてしまったのだ、と。

私は行く。

戦場へ。

未来を得るために。

「アイナ

目覚めるとそこは、全く知らない場所だった。

ふらつく頭に活を入れて起きあがると、そこには女性が礼をしたままたっていた。

「アイナ」シユトルムシユルトさま。お目覚めになられましたら艦橋までお越しくくださるよう申しついています。」

礼をしていた獣人族のお姉さんの話では、ここは戦艦で、「完全なる世界」討伐艦隊の旗艦だという。

ということは、アリカ姫、いや王女の戦艦と言っことだろう。

埒もないことを考えていると、艦橋に到着。

うすらぼやけた頭で見回すとアリカ王女がいた。



「アイナ、目覚めたな。」

うれしそうな声を聞いて僕もうれしくなった。

みんなは、と問う前にアーティファクトを起動。

止めるアリカ王女を無視して、ナギを追う。

瞬間的に結ばれた映像をみて、僕は絶句する。

倒れるゼクト、アル。

両腕を切りとばされたラカン。

剣を杖にたとうとしている詠春。

血反吐を吐きつつ立ち上がるナギ。

うそだ。

みんな強くて無敵じゃなかったのか？

嘘だ。

みんな常勝で無敵で不敗で！！

.....

それが、なんで、こんな傷だらけに.....

こんなぼろぼろに.....

おっばいまで、ずたぼろに.....？

お・っ・ば・い・が、ず・た・ぼ・ろ・に.....？

ユルサン。

くナギ

何が起こったのかわからなかった。

ラカンの腕が治り、詠春が立ち上がり、アルもゼクトも、みんな立ち上がった。

アタシ自身、不思議なほど力がみなぎっているのがわかる。

これは、この暖かさは……

「……………アイナ」「……………」

間違いない。

アイナが私たちに力をくれたんだ。

魔力を失って気絶していたアイナが、少し戻っただけの魔力をすべてつかって。

負けられねーよ、負けるわけがねーよ。

いつでも隣にいてくれるアイツがいるんだから……!

「アル、かませ……!」「わかりました……!」

「詠春タイミングあわせる……!」「了解です」

「行くぜ師匠……!」「しにぞこなつたわい……!」

「……………うおおおおおおお……!」「……………」

全部力を出し切っても、必ず、必ず倒してみせる……!

くアリカ

魔力の急速放出の影響か、アイナの髪の毛も目も色素が抜けていた。白銀の髪の毛と赤い目は、まるで作りもののように感じた。

「どうしよう、一手たりない……。」

アイナは真剣な顔で私を見つめた。

「何が足りない？」

「このままじゃ、ナギ達がかえってこれない。……どうしよう……。」

どうしてわかるのか、何でそんな判断になるのかわからない。しかし、彼の表情が確信を秘めていた。

だから私は信じた。

「今から戦艦を……。」

「それじゃ間に合わない。今ある手段じゃ間に合わないんだ。」

どうしよう、どうしよう、と錯乱するアイナを私は抱きしめた。  
瞬間、

「そ、そうか!!」

アイナは私を見つめていった。

「アリカ、仮契約をお願いします」

くナギ

勝利は力技だった。

フェイトなる小娘をたたき伏せるまでにはどうにもできなかったが、さらなる奥の「創造者」なる敵が恐ろしく強く、全く歯が立たないかと思わされた。

が、再びアイナが現れた。

今度は姿を伴って。

瞬間移動かと思ったが、揺らずその姿は映像のようだった。

「・・・アイナ」

『ナギ、ちよつと離れててね。』

始まる詠唱。それは千の雷。

だが、そんな高度な術は、おまえのアーティファクトでは・・・

『・・・千の雷!!』

魔法は発動した。

それも想像もしないほどの熱量で。

『ナギ、あわせて!!』

ああ、わかった、わかったよ。わかったさ!!

「やはりおまえはアタシの隣にいてくれるんだな!!」

くアリカ

魔力消失現象によるオスティア落下がとどまる。

それは魔力消失現象を支える術式が、次々と飽和してゆくから。

紅き翼が、各軍が、傭兵が、冒険者が、すべての人々が、次々と魔力を放ち満たしてゆく。

支えられるのではなく、全てをみんなで支える。

一部岩盤が回復不能距離まで落下し砕けたが、王宮も市街も宮殿も無事に戻った。

多くの人々もそうだが、紅き翼のメンバーも各魔力も体力も失っており、二週間以上の休養を必要とした。

そんな中、いち早く回復したアイナが、ふらりとどこかにいったかと思いきや、一人の少女を連れてきた。

それは行方不明になっていた妹、アスナであった。

精神凍結をされており、感情という感情を失っているアスナであったが、私に再会した瞬間、一筋の涙を流した。

「お医者様も時間が解決するって言ってましたよ、アリカ」

ああ、なんてうれしいんだろう。

なんで、こんなに嬉しいことをしてくれんだろう。

ああ、アイナ。



## 第七話 エピローグ

くアイナ

全魔法世界のおっぱい星人たちよ、僕は帰ってきた！！

我が愛しきナギのおっぱい修復にはかなりの時間を必要としたけど、わずかの間とみれば完璧といえるレベルだと思う。

他のメンバーのおっぱいも完全状態といえるレベルだし、アリカ王女もかなりいい感じだ。

アスナ姫やタカミチはこの先が楽しみだし、いやはや、魔法世界のおっぱいも安泰だ。

この辺の情報を絡めて「魔法世界胸探訪書」を認め<sup>したた</sup>たところ、MOSから「聖人」の称号を得てしまった。

同士達とともに深めるべき情報は共有すべきだから、というと、宮廷医局にいた同士たちは涙を流して感動していた。

おっぱいのほか、いや、思いのほか治療に時間がかかったみんなだったけど、本日の休戦調印式には間に合い、全員がその場に出席することができた。

すでにどんなやりとりがされたかは知られているので、MM元老員の解体及び元老員の捕縛、投獄、集中審議、判決などが与えられることになっている。

もちろん、現段階で真っ白な人間もいるので、そういう人たちに別途議会の方に参加してもらおう流れだ。

まあ、あの手の老害連中は、やくたいもない役職で文句だけを言

つていればいいのに、変に権力なんかを持たせるから悪いんだ。  
ろくでもない精神骨格しか持つてないから、権力を支えられない  
んですよ、ええ。

やはり若いうちに真理まことに触れていなかったんだらうなあ。

そんなことを考えていると、いつの間にかアリカ王女とナギが会  
見中央に移動していた。

あれえ〜、なんか、デジャヴ？

「・・・だから、アイナはわたさんといってるだらうが！！！」  
「・・・王女の唇を、緊急事態とはいえ奪ったのだ！責任はとらせ  
るに決まっておろう！！！」

『ぎん！！』

物理的な圧力を込めた視線が、視線が！！

「・・・細かなことは後で聞くとして、アイナはアタシの隣にたつ  
と誓いをたててる！」

「そんなことは知らん！ 王族の唇の価値と比べることなどできん  
！！！」

バチバチとスゴい魔力が満ちて幾ました。



「ちよつとまつたー！ー！！ 何で二人で決まるんだ？ アイナは愛育すると何度もいつてるよな？な？」とラカン

「ふっふっふ、私の夫となって、神世の知識と京料理を極めてもらいますんえ？」と詠春。

「・・・幼女になりましょー、ねー、アイナ。」アル、死ぬ。

「ここは一つ、私の弟子になって生活をともにするってのはどうだ？」「先生、賛成です！！」「ガトウとタカミチ。

「帝国にくるのじゃー！ー！！」とテオ。

やばいやばい、なんかやばい。

これ、この魔力、この前の魔力消失現象を押し返したときなんか目じゃないレベルじゃないですか？

「・・・やはりそろそろ決めねばならんようだな！！」

「受けてたつぞ、アリカ！！」「死すべき定めを背負え、ナギ！！」

「・・・アル、幼女+愛育、どうだ？」「・・・ラカン、いいですよ」

「・・・ガトウ、帝国指南役+弟子GET、どうじゃ？」「・・・テオ、呑みましよう」

次々と共闘を組む者たち。

「く、バラバラで原利があかんな、アリカ」

「いいだろう、左右で分かれる、いいな」

「よかるう！！！！」

瞬間的に圧縮された魔力ははじけ、停戦調印会場であったMM元老院ま町ごと消えた。

~~~~~

残った荒野での痴話喧嘩。

誰が勝って、どのように決着がついたかは、全て時間が解決する。

一部完

## 第七話 エピローグ（後書き）

思いついた後、ここまで一気に書いてしまいました。

時間を置いてのアップも考えましたが、他の書きたい題材もありましたので、一気にアップいたしました。

ご意見ご感想次第では、原作に近い二部も考えたいと思います。  
では。

## 第八話 プロローグ（前書き）

さて、第二部の開始です。

というか、着任からテストまでが第一部になりました。

お楽しみください

## 第八話 プロローグ

### 第二部

#### プロローグ

ナギ

「ちょっとやりすぎだったかなー、と反省はしたが、逃げ出されるとは思わなかった。」

周囲からは逃げて当然だろうと言う声も聞こえたが、男足るもの、これだけの美女に囲まれて後ろを見せるのはひどくないかと思う。

「まあ、朝昼晩のお勤めを休みなくヒト月も続けていれば、たいいていの男は逃げ出しますね」

いつの間にか現れたアルをひと睨みして隣のアリカをみる。  
わかつていると頷く相棒。

あの決着からこっち、アタシとアリカはどちらが先に妊娠するかで競争になっていた

もう、何度するかとか競っていたのは少女の時代だ。

今では着底時期なんてむしして、できるだけ大量にアイナを受け止めることだけに集中していた。

たしかに、日に日にやせ衰えるアイナには申し訳ないと思うけど、これは女の戦いなのだということ、理解してほしいというとなんとかがんばってくれ。

これこそ愛の証ということ、毎日証を立てさせていたわけだが、

やりすぎだったのだろうか？

とはいえ、にがさんよ、にがすわけがないのだよ。

くアリカ

まあ、やり過ぎだったことは認めよう。

覚えはじめでうれしくて、さらには適当なライバルまで常時いるのだ、燃えぬはずがない。

加えて開いては惚れぬいたアイナだ。

加減など知るものか。

・・・とやりすぎたせいで、アイナが再び逃亡した。

まあこれは休養とみていいだろうとおもっ。

思うが、なんとなく、隣にアイナがいないのが不自然に感じた。

・・・寂しいかもしれん。

不意に視線をあげれば相棒が私にアイコンタクト。

仕方あるまい。

頷く私。

そんなわけで、アイナ。

貴様の休暇は、我が王宮警備隊から逃げまどう日々となること  
が決定した。

賞金もかけるから逃げまどえよ？

くアイナ

MOSの伝でゲートポートから旧世界に逃げようとしたけど、す

でに王宮警備隊（女）によって封鎖されていた。

くそー、僕が女性に手を出せないことを知っていたの布陣だなあ。

。。。

いたしかたなくMOSの事務所を転々と逃げ延びていたんだけど、一斉に搜索の手が入り、僕は捕まってしまった。

二週間ほど逃げ延びたのは行幸なのか？

ただ見つけたのが、アスナちゃんだったのは不幸中の幸いだったかも。

独房に拘留されている中で、面会がきた。

アスナちゃんとタカミチとクルトだった。

曰く、僕を捕まえたときの報奨金があるので、それを資金に一緒に逃げよう、というのだ。

行き先はヘラス帝国。

つまり背後に第三王女がいることになる。

あの永遠幼女も良い政治家になるなあ。

それはさておき、

「僕を捕まえなくても、一緒に逃げてくれればいいのに」

「ねえ様達の動向を一度まとめないと、効率が悪いし。報奨金が入れば高飛びできるよ？」

わーさすが姫サマーとかタカミチとクルトが盛り上がる。

でもねえ、相手は「あの」紅き翼だよ？

目眩ましもほどがあるんじゃないかなあ？

半ばあきらめの境地に達した僕が言うと、アスナちゃんはつるつるした瞳で僕を見上げる。

「アイナ兄様は、アスナのこと嫌い？」

「やばいですねー、アルなら一撃で失神してますよ？  
とはいえそういう属性はありませんので。」

「ちい、タカミチ、クルト。第二作戦よ」

「了解です、姫様！！」「既成事実ですね！！」

「アホだ、アホだと思ってたけど、この娘どもは角付き幼女に染められすぎだ！！」

「さあ、アイナ兄様。わたしたちと気持ちいいことしよ？」「ええ、  
アイナさま。きもちいいですよ？」「我らの未発達な体を、存分に  
楽しんでください……。」

「……さあ！！！！」

牢をあけ、ズズイと迫る三人の少女。

「いったただきまーす」

いきなり現れてお持ち帰りをするアル。

「……変態でたー！！！！」

「変態とは失礼ですね。」

ぐにぐにと少女の肢体に身を埋めるアルは、心外そうにほほえむ。

「ねーアル。その三人をを好きにして良いから、逃がしてくれない  
？」



「だめですよ、アイナ。わたしは貴方も少女にしてTSして愛でる目標があるのです」

・・・ちっ、だめか。

とはいえ牢が開いたんだから、と外にでたとたん、背後にすごい気配。

振り向かなくなつてわかる。「二人」だ。

「まーなんだ。ワタシらもやり過ぎだつたつてわかつてたよ、うん。」

「そうだな、我らは調子に乗っていた」

うんうんと頷く二人の気配に、僕は心躍った。

これなら、これなら、三勤二休ぐらいの交渉ができるかも！！  
そう思つて振り返つてみた者の、なぜかそこには鬼が二人。

二人がつきだしたそれは、雑誌だった。

『絶対・絶賛！！マギステル・マギ』という記事。

逃亡途中で、なぜか付きつきりで取材されてしまい、仕方ないので出版の許可を出したんだけど、何か変だった？

「アタシ（わたし）の紹介が、なんでほかの奴らと同じ量なんだ！」

「うわーりふじんだなー」。

ともあれ、いろいろと説明して、記事の内容は出版社の事情だと言つことで納得してもらい、さらには夜のお勤めの減量も容認させた。

やった、これでデータをまとめる時間ができた！！

くアリカ

なんとというか、我々の旦那は乙女だった。

肉体接触よりも、もっと、こう、ときめくような人間関係を深めたいというのが逃亡の理由らしい。

だったらいつそのこと、旧世界に移住しよう、とナギが言うとなイナも賛成した。

さすがに私は王族としての立場が、と言おうとしたのだが、あれよあれよといううちに周辺環境が整えられ、摂政がおかれることになった。

安心して旧世界にわたれる、というところで、妹はどうするのか、と聞いてみると、

「ねえ様、私も旧世界に行きたい」

といった。

昔から自分を主張することのなかった妹が、どうしてもという我をとおした。

だから我らも全力で環境を整えた。

アスナを一度廃嫡し、そのうえでアイナと私の養女として迎えたのだ。

これにより、王位継承権は失われたが、普通の少女としての人生は全うできるだろう。

移住先はアイナやナギの故郷で、村全体で歓迎してくれた。

アイナなど、地元の青年団から帰郷を十二分に歓迎され、再び長になってほしいとまで言われている。

13の頃に村をでたという話だと聞いているが？

「アイナはさ、昔っから青年団の連中に慕われててな。」

そういえば、先日作られた「紅き翼の伝説」という映画でそんなシーンがあった。

村をでるというアイナ。止める青年団。殴り合いの中、叫ぶアイナ、というか本人がいないところでの愛の告白。  
で、物陰で聞いているナギ。

こんなもの本人たちと一緒にみていればおもしろすぎるわけ、  
いかにショーアップされているかを実感してしまった。

ともあれ、あの村をでるシーンは9割方本当のことだという。ちよつと格好よすぎるな。

「あ、あの、もしかして、アリカ姫とアスナ姫ですか？」

「元、だな。今ではコイツの妻と娘だ。」

アイナを抱き寄せるように言うと、周囲の村人が歓声を上げた。

「慣れぬ生活だが、皆のものに頼ろうと思う。よろしく頼む」

「アリカ、格好よすぎですよ？」

「ねえ様、横柄です」

なに、このぐらいの方が相棒のキャラに負けまいて。

ナギ

MM元老員残党による意趣返しともいえる魔族大召還が村で行われた。

私とアリカによる防衛線をあげることにより、村から悪魔たちを  
はなしたつもりだったが、抜けていった悪魔がいた。  
しまった！

そう思っても防衛線をあげることしかできない私は神に祈る。

あの人を、あの子を守って！！

くアイナ

二人の母が席を外している間、「世界胸漫遊録」をネギに読み聞  
かせる。

ネギは言葉も話せない頃から「おっぱい」がすきだった。  
今も読み聞かせている間も、すごい集中力を見せている。  
すばらしい才気に嫉妬すら覚えます。

そんな和やかな時間を過ごしていたところで、突如、家の天井が  
抜けた。

轟音とほこりが舞う中で、人影がたっているのがわかる。  
流れるような黒髪、しなやかな体、こぼれ落ちんばかりの胸……

「「ダウト！！！！！！」」

邪悪な笑みの悪魔が、一瞬たじろぐ。

「いいですか、魔族さん。胸は大きければいいと言うものではありませんし、その大きさが型くずれしないわけではないのです」

「おとうさまのいうとおりです！ 付け胸嘘胸は、周囲を騙すばかりじゃなくじぶんを傷つけるんですよ！？」

エグザクトリー！　すばらしいですよ、我が息子！

「い、いうじゃないか……。しかし、だな、胸は大きい方がいい  
だろ？」

「だいしょうじやありません！　それは体型にあった形で成長して  
いるかです、ね、おとうさま？」

「ネギの言つとおりだ。君の体型に合う胸は……」

悪魔を引き下ろし、胸をつかむ。

「ひゃう」とか声を出しているけど無視。

「ここだー!!」「おとうさま、こうでも……」「うん

、良い着眼点ですね。」「あ、でもおとうさまみたいな」「うんう  
ん、すばらしいな、ネギ」「ありがとうございます。」「

そんな間も、引き倒した悪魔の胸を「ぐにゅぐにゅぐにゅぐにゅ  
ともみしだく。

「あ、あ、あ、やめ、やめえてえ……」

まったくをもつて無視していると、全力で泣き出した悪魔はすごい  
早さでその場を去った。

後々、3OSおよびMOSへネギと共同著作と言つことで「悪魔  
の胸」という論文を出したところ、反響がすさまじく、「悪魔っ娘  
もえ」「俺のところにも強制召還」等々の反響が世界を席卷した。

我が息子の優秀さが世間に認められてうれしかった。

恐ろしいことだと思う。

あの優等生、アイナ＝シュトルムシュルトの息子なんだから優秀だろうとは思っていたが、さすがに優秀すぎだ。

魔法学校入学後、飛び級に飛び級を重ね、なんと十歳で卒業資格を手に入れてしまった。

もちろん、アイナによるワンツーマンレッスンがあったとはいえ、さすがに早すぎだ。

正直、今年卒業すると言う話をNGO「風の翼旅団」で聞いたとき、ああ、やっぱり私の息子だ、退学だ、と本気で思ったものだった。

現実には「卒業」。

卒業式で「最優秀生徒」として発表されたときは、喜びよりも周囲の人間のふがいなさを怒鳴りたくなかった。

あんな子供にしてやられて、悔しくないのか、と。

まあ、嫉妬の一つや二つはあるだろうと思って卒業生の席をみたが……。

女子、なんとなく「メロメロ」。

男子、なんとなく「尊敬・敬意」。

うっわー、やっぱりあいつの息子だわ。

「ナギ、もう少し雰囲気が悪くてもいいんじゃないのか？」

ワタシの隣に座るアリカはささやくが、これがアイナクオリティ  
！。

あいつは何故か学校どころか村も含めて男子に尊敬と信頼を受ける。そんな血筋に違いない。

「そうか、ワタシの息子でもあるのだから、自慢しても良いよな？」  
「もちろん、当たり前だよ、相棒」

卒業生たちの修行先が読み上げられてゆく。知り合いの子もいるし、知らない子もいる。

家に遊びに来た子もいれば、なぜかサインを私たちに頼む子もいた。

振り返ればタマにしか家にいない家族だったけど、それでも愛情が通った家族だった。

「何だ、泣いてるのか？」

「・・・こういう雰囲気って初めてでさ、泣けるんだ。」

「・・・じつは、私も泣けてる。」

ともにまともに学校なんて行ったことのない二人だったけど、息子のおかげで良い感動をもらった気がする。

くネギ

卒業。

ただがむしゃらに走り抜けた毎日でした。

学校入学前に出会った悪魔のお姉さんが多分僕の意志を固めたんだと思います。

強い魔力を得る、大きな力を得る、そして、大きな力に従わされている「おっぱい」を守る、と。

前へ前へ、どんどん前へ進み、どんどん力を付けて、意に添わぬ生活をする「おっぱい」を、衣食に困りやせ細る「おっぱい」を、世界中の隠れた「おっぱい」を手の届く範囲で全力に助きたい。

お父様にそう告白すると、わかったと言ってくれました。

その日から、毎日毎日休む間もなく修行と勉強の毎日です。

でもそれが「おっぱい」を救うことだと自覚した瞬間に喜びに変

わかります。

「ネギー！ あんなの修行はなんだったのよ？」

幼なじみのアーニヤもちよつと早い卒業。

一つ年上なのに今卒業つてすごいよね。

「・・・あなたはそのもう一つ飛び級してんでしょうが・・・。」

僕は関係なしに、アーニヤは十分にすごいんだよ？

「あー、もういいわよ！ そんなことより、修行先どこよ！？」

ぼく？ 僕はね、

日本で 学校の先生になるんだ！！



## 第八話 プロローグ（後書き）

どうもどうも、着実にお気に入りが増えていることに驚きよりも恐怖を感じている神代です。

原作をぶつ切りで一気にアップしていきますのでよろしくお願いします。

## 第九話 二年A組 子供先生

第一話 2年A組 子供先生!!

くアスナ

いやもうほんと、やりたい放題だわ、あの子。

自己紹介でパニックって武装解除かますわ、居眠りしてる生徒を魔法で起こすとするわ、アヤカに迫られてビビって逃げるときに窓から飛ぶわ。

本当に魔法を秘匿する気があるのか疑問になる。

さらに、ちょっとでも困ると「おねーちゃん、たすけてー」ってアイコンタクトしてくるのが始末に悪い。

「弟君、かわええねー。」

どうやらコノカの趣味には合うらしい。

確かにかわいいわよ？ なにしるアイナにそっくりなんだから。

幼い頃の写真なんかで見比べると瓜二つだし。

でもねえ、あれだけ出来の良い弟だと、こっちも立つ瀬がないと言っか何というか。

「ええやん、かわいい弟にワンツーマンで教えてもらえば。」

表情は「うちが代わりに喰ったるかー」てな感じなのが怖い気がするけど、随分と入れ込んでる気がする。

「なに、コノカってば、あたしの妹にでもなるつもり？」

「……それも良いかもしれへんねえ……？」

やべ、なんかやばい気がする。

「一応、かわいい弟だから、合法の範囲でお願いね。」

「・・・ちえー、アスナのいけずう」

非合法前提かよ、と、小さくつつこむ私だった。

くエヴァンジェリン

・・・・・・・・・・・・・・・・

「マスター、鼻血が大量にあふれでています」

いかんいかん、制御がきかん。

しかし、きたきたきた、ついに着たのだ、アイナの子供。

想定ではもう三年ばかり待たねばならんと思っていたが、予想を超えて飛び級を繰り返してやってきたという。

ふっふっふ、そんなに私に愛でられたかったか？

かわいいやつめ・・・。

「マスター、もうすこし落ち着いてください。すごい量の鼻血です」

おお、まずいまずい。

いかに真祖とはいえ、この調子ではまずいな。

深呼吸だ、すってーはいてーすってーはいてー。

よし、おちついた。

「・・・大丈夫ですか？ エヴァンジェリンさん。」

な、なにに！ 瞬動かあ！？

「こ、こ、こんな近距離で私を見つめるとは、殺す気か。そうだな、私を萌え殺す気だな！！」

「あああああ、エヴァンジェリンさんの鼻から滝のような血が、もう絶対助からないレベルの勢いで血が！！」

「ネギ先生、はなれてください、ここはわたしが。」

「いいえ、エヴァンジェリンさんは『僕の』生徒です！」

・・・「僕の」

・・・「僕の」

・・・「僕の」！！！！？

「うわ、急に血が止まったかと思いきや、エヴァンジェリンさんの顔が真っ青に、なんだかこのまま昇天しそうな顔色に！！」

「ネギ先生、マスターはもうライフはゼロなんです。もう勘弁してください・・・！！」

「いえ、僕が、僕の生徒を『保健室』に連れていきます！！」

・・・保健室。

・・・保健室

・・・保健室

・・・保健室？

「ええい、一足飛びすぎるわあ！！！！」

私の拳がヤツの頬をとらえた。  
もちろん私の意識も吹っ飛んだ。

くネギ

拝啓 父上様

修行の旅にでて一月が過ぎようとしておりますが、いかがお過ごしでしょうか？

僕は、元気です。

元気でしたが、大いなる間違いに気づいたことを告白します。  
あれほどまでに教えていただけに、あれほどまでに説明されていたのに、僕は巨乳の魔力にとらわれていたのです。

美しき胸の母上様たち、お父様の指導のおかげかタワワな村の女性たち、みな大きな胸の女性ばかりでした。

そのせいかなのか、僕は胸は大きくなければならないと言う妄執にとらわれていました。

今回修行できている女子中学の担当教室も美胸・巨胸の津波で、毎日が楽しすぎるぐらいでした。

そんな中、ある女の子を助けました。

僕の担当クラスの女の子で、みんなから「本屋ちゃん」と呼ばれる女の子です。

彼女はかなり大きくて重い本でも好きらしく、よく持ち歩いているのですが、その日は多すぎたようで、目の前の階段でバランスを崩してしまいました。

僕は反射的に加速して、彼女を抱き救いました。

片手を本に、片手を彼女に。

そのとき、包み込むようにして触れた胸に感動しました。

大きくなく、堅くなく、柔らかくなく、そう、今まで全く知らない感触の胸だったんです。

見た目で言えば「将来を見据える」胸なのに、なんで、と膝に力が入らなくなってしまうました。

とつさに救えたことで彼女は僕に感謝してくれましたが、僕は一日中困惑していました。

落ち着かないときには、と父上様の著書を見る癖がついていたのですが、そのときにやっと気づいたので。

『胸に貴賤なし』『与えよ、されば（胸元が）開かん』

目から鱗でした。

なにを僕は今まで語っていたんでしよう。

そう、なにも知らず、なにも感じず、なにもかもわかったかのように振る舞っていた自分を消し去りたい！！

ああ、なんて僕は愚かしかったのでしよう。

大きい、小さい、全く関係ないのです。

そのことに気づけたこの修行は、僕の人生そのものを塗り帰るものだと気づくことができました。

「本屋ちゃん」、いえ、宮崎のどかさん。

あなたの名前は僕の胸に刻み込まれました、そういう風に胸を張っていえる男になりたいと思います。

僕は「おっぱい」が好きです。

僕は「おっぱい」が大好きです。

父上様、恥ずかしながら、ネギ「スプリングフィールドは新たな道に立ちました。

父上様には祝福していただけると信じています。



第九話 二年A組 子供先生（後書き）

えーっと、主要な生徒はTSしません。

赤き翼の関係者の凡そがTSしているだけです。

期待していた人、御免なさい。

もう一つ、ネギは原作どおりの見た目+魅力50%増しです。



**第十話 それは伝染性ではない病気（前書き）**

えーっと、一応、アスナは年齢詐称しています。これデフォルト設定。

## 第十話 それは伝染性ではない病気

第十話 それは伝染性ではない病気

くタカミチ

まったく、どんな教育をしたのか知らないけれど、ナギとアイナの息子は品行方正成績優秀、非の付けどころのない美少年です。

髪の毛はいつでもサラサラ、肌はすべすべ、手足はすっきりって、もう少年の体型で、思わず……

「えっと、タカミチ。身体検査はもういいの？」

あ、いけないいけない。

身体検査と称して少年を一枚一枚剥くという性的な興奮は抑えな  
いど。

「あ、う、うん。もう服着てもいいわよ？」

「よかった、ちょっと肌寒かったんだ。」

にっこりほほえむ少年ネギ。

あ、ああああああああ、なんでそんなに私を誘惑するんだ  
あ。

この、純情てんぷてーしょん!!!!!!  
そんな私を見て、軽やかに笑うネギ君。

「あは、タカミチはいつも面白いな。」

「あ、いや、その、なんでもない!!」

くっそ、無邪気すぎて欲望をぶつけられないじゃないか。

それにしてもかわいいなー、心のシャッター、モータードラー  
ーイブ!!!

「じゃ、そろそろいくけど、タカミチ大丈夫？」

「ふえ？なにが？」

「だって、すごい勢いで鼻血でてるよ？」

く、なんたる不覚!!!

「これ、つかってね？」

く、なんたる光栄!!!

くネギ

最近みんな鼻血を出してるけど、何か悪い病気でも流行ってるのかな？

そんなことを物知りな千雨さんにきいてみると、彼女も鼻元を押さえて飛びのきます。

彼女はサイズも体型に合っている美胸おっぱいトップクラスで、姉さんにも通じる感じの人です。

だから早くから仲良くさせてもらっているんですが、なんとなく避けられている気がします。

何ででしょうね？

「そ、それは伝染病でも何でもねーぞ」  
「そうなんですか？ それはよかったです」

安心して、思わずほほえむと、千雨さんは真っ赤になりました。

・・・もしかして本当は病気で、僕なんかには知られたくないの  
でしょうか？

そういえば、女性には特有のことがあって、男には聞かせられない  
って聞いたことがあるなあ・・・。

「そういうことなんですか？」

「・・・ネギ先生よお、その知識は誰から聞いた？」

「おね・・・アスナさんです。」

「・・・そうかそうだったのか、解った。先生はちっと待ってる。」

そう言った千雨さんは、全力で走ってゆきました。

「アスナー、しにやがれーーーー！！！」

「・・・えー、きゃーーーー千雨ちゃんがバーサクってるう！」

「てめえ！ 自分の弟になんて知識を植え付けてんだあ！！！」

「ぜんぜん覚えないわよーーーー！！！」

がんと打ち合う音共に、なんだかよく解らない単語が交わさ  
れた後、音が止みました。

「・・・わり、それ教えたの、あたしだわ」

「・・・そこに直れ、そしてシネ！！！」

「だって、おちゃっぴーな子供のいたずらじゃない！！！」

ががががががが！！ とかいうすごい叫び声が聞こえます。  
・・・なにが起きてるんでしょうか？

くアスナ

なんつつか、今日ほどアイツを見直した日はないわ。  
単なる天才、というか努力バカだと思ってただけ、やっぱり先生とか任されることだけはあると思っただけ。

事の起こりはちよつと前の昼休み。  
私らがバレーをしてたら、高校生が私たちのコートを無理矢理奪おうとしてきた。

そのときはタカミチ先生が割って入ってくれたんだけど、今日はさすがにいやな感じだった。  
なにしろバレーの授業で予約していたのを知っているのに、無理矢理奪いにきたのだ。

何とも計画的な嫌がらせだろう。

さらには代行で来ていたネギをかわいからと抱きしめて、抱きしめ回して、奪うとか言い出したのだ。

「ふふふ、おもしろいこというなあ、おばはん。」

この時ほどコノカが怖いと思った事はないわ、うん。

それはさておき、ドッジ勝負となったんだけど、それなりに超人の多い我がクラスに勝てる凡人など居るわけもなく、即時圧勝。

多大なる戦果を喜び合う私たちだったが、バカ高校生がやけくそに投げたボールがアヤカをおそおうとした。

そのまま胸にでも激突かと思いきや、割って入ったのはネギ「スプリングフィールド」。

そのなも高き「子供先生」。

ギョルリと威力を放つボールを片手で受け止めて言い放った。

「僕の生徒おっばいに、指一本ふれさせません！！」

ここでアヤカ撃沈。シヨタ先生に「僕の」呼ばわりされて電撃退場。

「あなたたちも守るべき生徒おっばいではありません。しかし、礼を重んじず姿勢正しくないあなたたちは正しい生徒おっばいではありません！！」

ずばーん！！

ちよつと日本語がおかしいのは仕方ないけど、その瞬間、誰もがネギの背後に夕日を見た。

それを幻視した高校生が崩れ落ちる。

ゆっくりと近づくネギは、ぼんと肩をたたく。

「忘れてはいけません、傲つてはいけません、胸を張りなさい、姿勢を正しなさい。あなたたちは常に上を向いて進むべき存在なのです。正しさを抱きなさい、妬みを捨てなさい。そうすれば正しい生徒おっばいになれるのですから」

泣いたわ、泣いた。まじ金八時空だったわ。

高校生たちも私たちも、走ったよ、走っちゃったわよ。

「ネギせんせー」って。

そしたら、マジ笑顔で、マジ幸せそうに笑うんだわ。

ありやー、勝てねーって。

弟だから、姉だから？ いやいや、ああいうチートやバグは相手にしちゃだめだって。うん。

本気で勝てないっと思うと、悔しくないことを発見して大人になった気がした今日だった。

「アスナ、涙ふきやー」

悔しくなんかないやい！！

## 第十一話 爆雷 バカレンジャーと処刑人

第十一話 爆雷 バカレンジャーと処刑人

くネギ

拝啓 父上様

大変なことが解りました。

なんとうちのクラス、ハイレベルの「バカ」が五人いたんですが、そのトップ、バカリーダーが「アスナねえさん」だったんです。クラスでは「バカレンジャー」と呼ばれ、「バカレッド」とリーダーを襲名しています。

・・・ちょっと格好いいと思ったのは秘密です。

ともあれ、あの、知的で慈悲深く世の中をあまねく見通すがごとくのお姉さまはもう居ません。

大変悲しいことですが、さっくり教育しなければならぬと思い、当家学習道具を持ち出したところ、アスナ姉さんは仰いました。

「な、な、なんでも魔法で解決できると思ってるんじゃないわよ！何のために修行で先生してるの！？ 実力で教えなさい！！」

なんと言うことでしょうか、目から鱗でした。

さすが姉さん。枯れたるもその片鱗あります。

そんなわけで、僕は試験当日までバカレンジャー全員を缶詰にすることにしました。



少なくとも二十点は上げてもらいますよ？  
ふふふふふふふふ。

PS

ここ数年分のアスナ姉さんの成績を入手しました。  
父上の言うとおり、家に送られてきたものは巧妙に偽装されてい  
る偽物だと判明しました。

罰は母様たちが直接お願いします。

金銭面での罰は、僕をカツアゲすれば解決されてしまいますので。

綾瀬夕映

驚いたのです、びっくりなのです。

私たちバカレンジャーは、なんと図書館島の最深部に拉致監禁さ  
れたのです。

監禁したのは担任である「ネギ」先生。

甘い笑顔とかわいい表情で人気急上昇中の先生なのですが、先生  
が私たち専用の講習をされると言い出したのです。

とてもありがたいことなのですが、自分の興味がもてない勉強に  
は熱が入らないわけで、その分本でも読んでいたのですが……。

「みなさん、学ぶことは苦しいことです。でも、身につけた知識が  
役だったときの喜びはこの上もないことです。その事を貴女たちに  
知ってほしいのです。」

えー、マジで感動したのです。

その本気に当てられてきたのが図書館島最深部。  
学習教材は山ほどあり、お風呂もトイレも寝室もあるというすこ  
い環境。

時々怖い気配は感じるのですが、身の危険以上のものは感じない  
のでみんな無視しています。

さらに怖いのは「ネギ先生料理」

アスナさんの話では、ネギ先生のお父さん直伝だそうで、懐かし  
い懐かしいと涙を流していましたが、私たちも正直に美味しいと感  
じました。

おいしいのですが、何というか、その、服がきつく感じるのです。  
その、つまり、その、太ってるのでしょうか？

いえ、おなか周りや足周りは問題ないのですよ？

でも、なぜか胸周りが、きついのです。

・・・今まで感じたことのない未知のキツサともうしましょうか。  
なんだか恐ろしいのです。

そんな天国だか地獄だかわからない毎日がそろそろ終わります。  
明日は中間試験ですから。

く 朝倉和美

いやはや驚いた。

今日は驚きの連続だ。

まずは今日の採点。

なんと2ーAがトップ。

ありえねー。

さらにバカレンジャーが信じられないほど点数アップ。

もつとありえねー。

自慢げに採点を見せられて、自分より点数が高い教科を発見。

・・・信じたくねー

まじで泣ける。

ま、そのへんは子供先生の指導力の成果でいいと思うんだけど、もつと驚くのはトトカルチョ。

なんと食券1000枚もうちのクラスにかけた強者がいた！！  
どうやら学校関係者ではないらしいんだけど、配当にきた二人をみて息を呑んだ呑んだ。

超絶美人で美乳で巨乳。

そんな二人がスルスルとやってくるんだから驚いたし、にっこり微笑まれてミンナトロケたってば。

バリバリ写真にとったのに、一枚も残ってないってどういうことよ、とおもいつつ、データを整理していると、一枚だけ写っていた。

「あれ、朝倉。なにみてるの？」

「あ、アスナ。今日みた超絶美人」

ほいっとプリントアウトを見せた瞬間だった。

ガタガタと震えながら真っ青になるアスナ。

挙動不審に左右を見回した後で、なにを思ったのか、窓から飛び降りた。

「あ、アスナ！　ここ三階！！！」

みれば正面の木と校舎の間をはねて地面まで到達。  
ダッシュで逃げようとしたところで、二人の人影に捕まった。  
それはさっきの超美人二人組！！

「・・・た、たすけてえーーーー！！！」

そんなアスナをゲインと殴る赤髪の超美人。

「人聞きの悪いことを言うな、バカ娘が！！！」

続いて金髪美人も殴る。

「こんなアホみたいな成績を取っておいて、嘘の成績を送ってくる  
ようなバカなど生きてる価値もないわあ！！！」

うつわー、今までの成績ばれてなかったんだー、それはそれだけ  
ですげえぜ、アスナ。

というか、この二人、アスナの保護者？

・・・？　若すぎやしないか？

「な、なんで成績がばれたのですかあ？」

「おまえの先生からの報告だ」

ああ、弟だったよね、ネギ先生

ということは、二人は保護者決定？

「ね、ね、ねぎいいいい、チ、チクツたわねえ！？」

今晚夢にでてきそうな声だったが、私の隣にいつの間にか現れたネギ先生。

「アスナ姉さん、いやさ、アスナさん。僕は心の底から姉さんの成績を信じていたのに、裏切られた気持ちで一杯です」

「こつちだつて裏切られた気持ちだわよ!!」

「いいえ姉さん。それは因果応報ですよ?」

「それでもアタシはあんたを恨む!!」

「いいでしょう、姉さん。姉さんの心根が直るのならば、いくらでも恨んでください。」

ずびつと胸を張るネギ先生。

裏切りものーと叫ぶアスナをみつつ、ネギ先生は手元の書簡を下に投げた。

受け取ったのは赤髪の超美人。

「ナギかあさま、それが最新の成績ですよ」

「・・・そうか、わかつたぞ、我が息子」

ですよねー。

アスナの親つてことは、ネギ君の親つてことだものねー

「さてアスナ。その根性をたたきなおしてやるうじやないか・・・」

ふははははは、と笑う二人の美女に、ネギ先生が声をかける。

「かあさまがた、まずは今の成績をみてください。」

ちよつとこつちをみた後で、書簡をみて驚く二人。

「ネギ、これは真か？」

「はい、そうです」

「姉をかばっているわけではないのか？」

「学園長が直接採点してますので、間違いありません」

ふむ、と腕を組む赤髪の美女。

それにささやく金髪の美女。

お互いに囁きあい、双方がうなずいた。

「よし、我らをたばかっていた罪だけ問おう。」

「そうだな、ソナタの留学停止も視野に入れていたが、それは勘弁してやるが……。」

「この世の地獄というものが、こういうものかを実感せねばな」

「いやーーーーー!!!!」

この後三日間、アスナは行方不明になった。

ネギ先生の話では、アスナとネギ先生は異母兄弟で、その双方の母があゝの超美人二人なのだそう。

共通の父親がいると言うけれど、わりとオープンな結婚だねえ、と言うと、彼は照れくさそうに笑った。

む、結構かわいいかもしれない。

アヤカのことを、とやかく言えないかなあ、と思う私だった。

くノカ

永遠に謝り続けるマツスイーンになっていたアスナが自分を取り戻したのは、帰ってきた翌日だった。

その間、久々に保護者にあつたネギ君が、本当に子供のような甘えっぷりを披露して、ミンナをメロメロにしたり、お二人に「ネギ君を婿にください」と申し込む生徒が殺到したり、ネギ君を賭けて二人に決闘を挑む魔法先生が続出したりと大変だった。

もちろん、大戦の英雄「ナギ」と「アリカ姫」にかなおうはずもなく、タカミチ先生も含めて全滅していた。

とはいえ、さすがに全滅はまずかつたらしく、しばらくは学園警備のためにこの地に滞在してくれるという。

「ふむ、詠春の娘は、挑んでこないのか？」

アリカ様の言葉に私は首を振る。

「勝てぬ勝負は土俵を変えることにしております」

「さすがは陰険巫女の養女、性質がそのままだな」

「はい、お母様は、私が尊敬する人の一人です」

何しろ、かの英雄大戦で、誰とも共闘せずに戦い続けた一人なのですから。

「というと、胃袋か色香で籠絡すると？」

「色香はさすがに……。とはいえ、胃袋は一興かと」

ふむ、と腕を組むアリカ様は、一応、と言葉をつなぐ。

「……あれは、アイナの愛弟子だ。あの、陰険巫女が『京料理の

神髓を身につけさせる』といいわしめた、あのアイナの、な」

衝撃です、激動です、で激震です。

計画が大幅に修正されなければなりません、お母様。

「加えて、家事技能はうちの本国やヘラス帝国のメイド長クラスだ。女としての勝負を仕掛けるなら覚悟しろ」

・・・なんてことでしょう。

あの十歳の少年に色仕掛けのみで挑まなければならないとは・・・。

しかし、色仕掛けが通じるのかは疑問が大きい。

なにしろ、かの地は「美女」ぞろいと聞く。

・・・くっ、なんと恐ろしい。

だが、まけはしない、まけはしない！

「まったく、おまえもあいつらもなにを焦っておる。ネギはまだ子供だぞ？」

「そうは言いますが、あのアイナ様が心を決めて旅にでたのも13だったと聞きます。ならばその心を決める前の年も10前後だったのではないですか？」

「アイナと相棒が出会ったのは13前後だったと聞いてるぞ？」

それが三年前倒し、でもかまわないと私は思う。

彼の心に残れるなら、それもまたよし、だ。



## 第十一話 爆雷 バカレンジャーと処刑人（後書き）

今更ですが、本編では「ナギ」も「アリカ」もガンガン生きてます。

こんな調子で魔法世界にいくのかいな、と疑問に思っている人もいるかと思いますが、その辺は今のうちに種をまきます。というか、三部での種まきを予定してます。

お楽しみに

## 第十二話 エピソード

成績をみながらミンナが喜んでいたが、雪広アヤカから語られた真相はミンナで驚くものだった。

なにしろ、今回の成績が悪かったら、子供先生の排斥がPTAから言い渡されていたのだという。

そんな事情があるならもっとがんばったのに、という生徒に「子供先生」は言う。

「成績の問題は僕が教師である上で常について回ります。みなさんに毎回奮起していただくことは難しいので、地力を上げていただくと考えたんです。」

まあ、確かにその通り、とクラス全員が納得してしまった。

実際、集中講義があつたとはいえ、成績上昇はすさまじく、今後の安定も見込まれていた。

ゆえに、中学三年という大事な時期でありながら、子供先生にゆだねられることになった。

しかしそれは激動の一年になることが約束された年だった。

）二部完

## 第十二話 エビローグ（後書き）

えー、こんな感じです。

毎日更新したほうがアクセス数を稼げますよ、と忠告していただけたのですが、数字としてのアクセス数より、読み手の感覚として一気に読みたいという欲望があるので、今回のようなアップの仕方をしていきます。

お楽しみ頂けましたでしょうか？

第十三話 三年A組 ネギ先生（前書き）

今回はプロローグなしで三部突入です。

## 第十三話 三年A組 ネギ先生

### 第三部

#### 第一話 三年A組 ネギ先生

↳長谷川千雨

まあなんつうか、常識を斜め上に行く現実だと思うよ、実際。わずか10歳の子供に教師をさせることも異常なら、それを認めるPTAも異常だ。

まあ、実績はあっただろうさ、実績はな。

あのバカレンジャーの成績を上げさせたっただけですごいし、ポストバカレンジャーを意識させたのもすごいだろう。

更正不可能とまでいわれたエヴァンジェリンなんつう生徒も登校させてるし。

どこの無敵だよ、という廃スペック。

かけてくわえて、あの見た目。

・・・最近クラス中がシヨタになってる気がするぜ。

・・・この「ちう」様も。

ネットアイドル「ちう」としての立場が速攻ではれてたと気づいたのは、この前の春休み。

ネギ先生のパソコンの調整をしにいったときだった。

接続がどうのとかさそういうのじゃなくて、単純にスタートアップの問題だったからわかるんだけど、ウェブブラウザのブックマークが問題だった。

生徒のブログが一通り載ってるんだけど、そのなかに自分のHP

があつたときに凍った。

つつか、速攻で消そうとしたのに止められた。

「こんなによくできているページのリンクを消させませんよ？」

ネギ先生は一応、どんなHPかはしっているようだったが、写真修正まで誉められるのは死ぬかと思った。

「これは美しい写真です」

曰く、体の理想曲線を無視していない自然範囲であり、努力と気力で到達できる範囲の理想にすぎないそうだ。

とか何とかいっても「嘘」はうそだ、という私に、ちょっと怖い笑顔のネギ先生は、新学期明けまでに、「嘘」をうそで無くさせた。

・・・食事と姿勢を変えるだけで。

今では写真通りの体型になり、衣装の型紙から変えなくくちゃいけなくなった。

はつきり言おう、どこの廃スペックだよ！！と。

正直に言おう、クラスの見た目年齢が足並みそろってないとか、カラクリつつかロボとかどうでもいいよ、ネギ先生、あんたは何者だよ！？

自然、ネギ先生と視線で追ってしまう自分のいいわけを考えながら、猛然と疑問を視線に乗せる私だった。

「春日美空「いやー、猛烈な勢いで撃墜されてるし。」

これが大戦中ならキルマークで腕がいつぱいになるんだろうねえ、と苦笑いしてしまう。

シスターシャークテイーの命令とはいえ、こんな子供先生のストーカーのような真似はしたくないんだけどねー、と。

私が生活している協会のシスターである「シスターシャークテイー」は、魔法世界の戦争英雄である「赤き翼」の大ファンだ。

中でも「緑一点」（なんで緑なのか知らないけど）、アイナ＝シユトルムルトのマニアでなのだ。

どうやって入手したか知らないけど、魔法世界で設立された「Loveアイナ」会員カードなんかも持っていて、そこにはシリアル番号が「10」と振られていた。

興味半分に会員が何人いるのかと聞いてみると、夢見るかのような瞳で数十万と語り、アイナ＝シユトルムルトの魅力を30分も聞かされた。

つつか、ネギ＝スプリングフィールドと結婚して、今や人の夫。ファンもくそもないだろうに。

が、マニアというのはそれでもファンをやめられないらしく、会員同士で情報をやりとりしているそうだ。

で、そんなマニアの前に、子供の頃のアイナ＝シユトルムルトを彷彿とさせる、実の息子が現れたというのだから狂喜乱舞の事態だろう。

そんなわけで、毎日のお仕事の代わりに、ネギ先生の毎日を写真に写し、シスターシャークテイーに届けるというのが日課になった。なっただけ、なっただけ……。

なんつつか、シスターの精神が最近やばいんだわ。

なにしろネギ先生、むちゃくちゃ女子にモテるんだわ。

うちのクラスの大半は持っていかれてるし、残りも好意的に迎合

してる。

常識の皆ってというか、頑固一徹のはずの長谷川まで熱い視線を送ってるし。

鳴滝姉妹は年齢的につり会う自分達こそ隣にたてるのだ、とか言い切る始末。

いやいいんだよ、そんな言い合いもコミュニケーションの一部だから。

でも、そんな情報をどこから変えたシスターが、ネギ先生と一緒に写ってる女子の写真に十字架を刺し始めたんだよねー。

あと、ネギ先生にラブってる生徒のリストアップ。

素行調査とかいってるけど、絶対違法な手段で情報集めてるよね、あれ。

タカミチ先生もなんだか協力してるみたいだし。

うちの学校は「へんたい」が多いなー。

こんな環境でネギ先生は正常な成長ができるのか、大いに疑問だ。リミット超えたら協会本部に報告だな、うん。

これが生徒の愛だね。



## 第十四話 吸血と言えは「チュパカブラ」

### 第三部

#### 第二話 吸血と言えは「チュパカブラ」

「アスナ

我らがバカレンジャー、バカピンクこと佐々木まきえが倒れたと情報を得た私たちは、現場に急行した。

バカブラックこと綾瀬は完全にシロウトなのでピンクの介護を頼んだんだけど、首筋の傷をみて私はおおよその事態は把握していた。まあ、どんなバカでもあの傷をみれば察しがつくわな。

「アスナねえさん、やはり……？」

さすが優秀な我が弟は、首筋の傷でおおよそ把握したようだ。

「そうよ、……チュパカブラ、違いなわ」

「……そうですか、とうとう学園まで……。」

「「おいおいおい（アルアルアル）」

イエローとブルーから何故か凄いつつこみが入った。

「あの傷跡をみれば、誰だどうみても『吸血鬼』でござろうっ?」

「そうアル。あれは吸血鬼の仕業アルね!」

まあまあ、待ちなさい。

吸血鬼なんてそうそういるもんじゃないし、あの人達は昼間寝てるわよ? ピンクは夕方襲われたし。

だったらチュパカブラ、決まりでしょう!?

「アスナねえさん、ちょっと待ってください。」

弟は、深呼吸してから私にささやいた。

「タカミチの話では、じつは、エヴァさんが『真祖』らしいんです」

え……、まじ?

「はい。なんでも、学園警護のために契約していると聞いてましたので……、まさか……。」

じゃ、あんた、吸血鬼がいるって知ってたのに、なんでチュパカブラなのよ?

「証拠もなしに自分の生徒を疑えっていうんですか?」

苦笑いの弟。

なるほど、いい先生だわ、あんた。

くエヴァンジェリン

ち……血が足りない。

やつが学園にきてから、ことあるごとに挑発されているため、鼻血が続出。

そろそろ限界にきている。

くそー、あのハート泥棒さんめ!!

とか何とかいっていても仕方ないので、手近なところですまそうとしたのがまずかったのか、早速学園の手のものが現れてしまったようだ。

つつか、ありゃ、ネギじゃないか!

あと、バカレンジャー!

うわー、ピンク襲ったのばれてるっばい?

耳を潜めて聞いているとレッド

「そうよ、チュパカブラ、違くないわ」

「……そうですか、とうとう学園まで……。」

おいおい、ばれてねーよ!

つつかなんだよ、チュパカブラって!!

思わず取り乱した私だったが、ネギの言葉が胸を打つ。

「証拠もなしに自分の生徒を疑えっていうんですか?」

ちくしょう、証拠なんてありまくりじゃないか。  
牙の後、残留した魔力特徴、そして私の存在。

ああそうさ、契約の範囲内なら襲ってもいいことになっているんだ。

なにを遠慮することがあるというのだ!!

・・・ちくしょう。

↳宮崎のどか

私は走っています。

誰かに追われていたから。

図書館探検部の活動の後、返却し忘れた本があったので一人で戻ったのが間違いでした。

音もなく忍び寄る気配、感じる身の危険。

ああ、なんてホラー!!

・・・まるで物語の中のヒロインみたい・・・

って、現実逃避している場合ではありません。

表通りにでようと思いましたが、道に迷っていつの間にか並木通りに。

人っ子一人いない並木通りに。

瞬間、自分のクラスが変わったことを理解しました。

ヒロイン 犠牲者

ど、ど、ど、どうしよう!!

ヒロイン気分で余裕のあった体が急に萎縮し始めます。

こんな時は、こんな時は、と部活心得を思い出してみましたが、真っ白すぎてわからなくなってしまってます。

今出来ることは全力疾走・・・しかないのでしょうか？

悔しい悔しい、それ以上に怖い！！

瞬間、あのときを思い出す。

階段から転げ落ちそうになった私を助けてくれた華奢な少年の腕の力を。

「・・・た、たすけて、ネギ先生ーーーー！！！」

くネギ

踏みしめ、全力で加速する。

目の前で繰り広げられる光景を否定せんがために。

まきえさんの残留魔力から拘束性がない補給のみと看取った僕は、犯人をドウコウしようという意志はありませんでした。

しかし、目の前の光景は看過できません。

金髪妙齡の女性は置いておいて、のどかさんは僕の生徒おっほいなんですから！！

「・・・た、たすけて、ネギ先生ーーーー！！！」

反射的に隣を走るアスナ姉さんを投げつけた。

「ネ、ネギイーーー!?!」

姉さんの持つ固有能力である「魔力完全無効化」によって、吸血鬼が吹っ飛びます。

すると妙齡な女性の姿が一瞬かすみ、少女の姿になる。

その姿は見まごう事なき……

「エヴァンジェリンさん……。」

くアスナ

とりあえず、長身キンパツにドロップキックをかましたらエヴァちゃんになった。

その気配、術、構成はふつうの魔法使いなんて及びもつかないもので、すでに答えといえた。

つまり……やっべ、まじで真祖じゃん。

とはいえ、闇の福音とまで呼ばれた賞金額600万ドルの悪の魔法使いが、なんでこんなセセコマシく吸血するかね？

そんな悪の魔法使いにネギは言う。

「……エヴァンジェリンさん！ もうやめてください!!」

美少年オーラ全力のネギにひるんでか、ふらつくエヴァちゃん。

「……う、うるさい、だまれ……。」

なんだか覇気がない。

というか、すげー弱々しい。

「転化したての真祖だってもっと強いはず。」

「……おまえのせいだ……」

あー、あー、そういうこと？

「そういうことです」

私の隣に現れたのはチャチャマルさん。

って、驚くわよあんた！

「マスターはネギ先生と接触を持って以来、鼻血で大量の魔力を失っています。それも還俗不能寸前まで。」

いいの？そんな弱点教えて。

「……魔法関係者の黙認を得ていたのですが、さすがに派手にやりすぎです。」

なるほど、そういうこと、ね。

気配を探れば周囲は魔法先生に囲まれているようだった。

しかし、うちの弟はそんな裏取引は知らない。

だからまっすぐに、ただ真っ直ぐに相對する。

「……そんなに血が必要なら……」

僕から、吸ってください!!!!!!

くチャチャマル

瞬間、マスターが七穴憤死状態になりました。

七穴とは、目、鼻、耳、口、すべての穴から血が吹き出す状態であり、神槍と呼ばれた八極拳使いすら超える一撃といえます。

相対するネギ先生は、少しだけ頬を染めて、一歩ずつマスターに近づきます。

魔法もなにも準備していないことを見れば、それは善意だけとされますが、その善意がマスターの息の根を止めようとしているのは事実です。

「ネギ先生、あの、申し出はうれしいのですが……。」

その申し出は、マスターの息の根を確実に止めますので。

「いいえ、チャチャマルさん。僕は、僕は、僕の大切な生徒おっほいを守るためには、どんな努力だって惜しみません!!」

や、やばいです、マスターの鼻から大量の血が!!

「……だから……。」

するりとシャツを半分脱いだネギ先生。

……どうにも色っぽいです。



わたしですらちょっとクラッとなりました。

「……やさしく、してください、ね？」

マスターがゆっくりと、まるで映画のワンシーンのように崩れ落ちてゆきます。

「ね、ネギ先生、もう、もう勘弁してください、マスターのライフはもうゼロなんですぅー……！！！」

「……その、あの、ぼく、初めてなんで……」

まるで何かにはねられたかのように、マスターが跳ね上がりました！！

「ダメです、だめなんです、もうだまってええ……！！！」

く春日美空

えーっと、シスターシャークチーが、この前の動画を見て七六

憤死しました。

さらに追い打ち攻撃で天井まで跳ね上がりました。

すげー威力だった。

とりあえずシスターシャークテイーから新しい望遠手ぶれ補正付きビデをカメラを渡されて、今以上の活躍を期待するとか言われたのが恐ろしい気がする。

今回の事件の、ことの詳細は知らないけど、聞くところによるとネギ先生はエヴァンジェリンさんに定期的の血をあげる契約をしたそうだ。

かわりに魔法を教わるとかなんとか。

すげーよなー、あのダークエヴァンジェリンをにして魔法を教わるなんつう発想が常人を超えてる。

天才って考えることが違うよなー。

## 第十五話 強引な行き先変更

### 第三部

#### 第三話 強引な行き先変更

くコノエモン

さーて、まずい。

聞けば3 - Aの修学旅行先希望がイギリスといただいた。

ネギ君の生まれ故郷及び世界史学習という手落ちのない理由なだけに却下しがたい。

しかし、関西から、詠春からの圧力はすさまじく、3 - Aの修学旅行先を京都にしなければ東西戦争も覚悟しろト力言ってきている。あの行き遅れはマジで言ってるのがわかるだけに、何とかしたい。どうしたものか、と小首を傾げたところで、思考のはじっこにいる少女の存在を思い出した。

ふむ、その手でいいかな？

くネギ

なるほどと思いました。

師匠が修学旅行に参加できる限界距離が京都だということです。

師匠は吸血鬼であり、様々な契約に縛られる存在です。

その契約の中に学園守護があり、学園を離れられる距離が決まっ

ているそうです。

つまり、クラス全員で修学旅行に行くためには、京都にするしかない、というわけです。

エヴァンジェリンさんは「気にするな」と言ってくれていますが、僕としてはみんな大切な生徒おっばいです。

生徒おっばいに差などありません。

さらにはエヴァンジェリンさんは僕の師匠です。

不利益なんて考えられません。

そんなわけで、みんなを説得しようと思ったんですが、いつの間にか委員長さんが取りまとめてくれました。

委員長さんは、中学生とは思えないほどのバランスのとれたスタイルと胸をしたすてきな人です。

この上、成績も評判もいいのですから、天はにぶつもさんぶつもあたえる、そんな人です。

とはいえ、全てが天から与えられたものではなく、本人がちのにじむような努力をしたからこそ、だということも知っています。

どんな言葉よりも彼女おっばい自身が語っているのです。

くノノカ

さすがお母様、手段を選ばんお人や。

アスナですら苦笑いだったけど、アスナ自身もイギリスに帰ることをいやがっていたので、京都行きは「バッチコイ」らしい。

とはいえ……

「学園長を『戦争するぞ』って脅すって、あの人なに考えてるのかしらっ。」

思わず腕を組んで首をひねるアスナ。  
まあ、あのひとは未だアイナはんを諦めてない。  
そのへん、というか、妄執が今回の原動力やろつ。

「まあ、さすがに母様たちも修学旅行まではついてこないでしょうし」

いやー、わからへんよ？

何しろ赤き翼の戦巫女、無音拳の弟子、さらには伝説の息子までいるんだし、加えて「闇の福音」「黄昏の巫女」・・・絶対警護対象やろ？

「・・・うわぁー、確かにそうかも。」

がつくりうなだれるアスナを撫でながら、私の隣のせつちゃんに微笑みかける。

「がんばるな、せつちゃん」

「・・・うん、このちゃん」

お母様の想いはしつとる。

せやけど、親友たちやネギ先生の旅行だって守りたい。  
せやったら、なにを優先するかは「ウチ」次第や。

く エヴァンジェリン

浮き立つ気持ちを抑えるのに全力を使わざるえなかった。  
何しろ修学旅行だ、お泊まりだ、外泊だ、京都だ！！

それも、ネギとだ！！！！！！！  
飛ぶだろ、飛び立つだろ、悴だろ、沸き立つだろ！！  
いやふうふうふうふう！！！！！！

「マスター、ベットの上で跳ねるのはどうかと・・・。」

やかましい、チャチャマル！！

この張り裂けんばかりの想いをどう制御しろと!？

「少し静かにしていただかないと、先日のネギ先生の台詞を再生します。」

・・・あー、すまん。

あれはマズい、というか、なんとというか、聞きたいけど、聞けば再起不能になるのがわかってるから、その、すまん。

・・・でもな、あれ、かなりマズいだろ？

「はい、私は音声だけですが、動画でとっていた魔法生徒がおりまして・・・。」

な・・・なんだと!!!

あの甘美な光景が、ど、ど、ど、動画でえ!!!

「ご安心ください。マスターがネギ先生の首筋を食っている動画と引き替えに入手しています」

よくやった!!!

さすが我が従者!!!

「・・・ところで、その映像は、今、みられる、か？」

「お勧めしません。確認のためにみた私も、何度かハングアップしました。衝撃です。」

「・・・ふむ、さすがにまた再起不能はマズいな。」

よし、魔法球でみよう。

あそこで再起不能になっても時間が解決してくれるではないか。

私のその提案に、チャチャマルはちよつと驚いたかのような表情でうなづく。

「・・・マスター、その際にはデータ交換をした先方の希望で共有データの交換会を開きたい旨の申し出が・・・。」

ふむ、と私は首をひねる。

「・・・よかろう、おまえが「よし」と判断した相手だ。喜んで魔法球へ招待しようじゃないか」

「はい、我が主」

く春日美空

う、う、う、ウチのシスターってのは正気かあ!?

本日一緒につれて行かれたのは、かの真祖、エヴァンジェリンの邸宅だったりする。

魔法世界最強の悪にして協会最大の敵。

その真祖相手にシスターシャークティーは笑顔であくしゅしてるし!!--

「ご紹介します。あの動画を撮影した我が使徒、春日美空です。」  
「おお、春日、おまえがあれを撮影したのか。」

まるで、そう、まるで尊敬する人間に出会ったかのような態度です。

信じられませんよ、ええ。

うんうんと満足そうに肯いたたエヴァンジェリンさんは、私たちを屋敷の中の一室に招きました。

何でもそこにあるアーティファクト、魔法球の中での時間を二四倍に引き延ばしてくれるものだそうだ。

つまり、中で一日過ごしても外では一時間しかたっていない計算だ。

すげー、闇の福音、すげー。

率直な感想だったんだけど、エヴァンジェリンさんは溜息とともに首を振る。

「貴様の神映像くらべれば、こんな魔法球など塵に等しい」

シスターも同意を示し、二人で認めあっている。

もう勝手にしてください。

とりあえず、チャチャマルさんを含めて三人で魔法球に入ったのだけど、翌朝までシスターは帰ってこなかった。

・・・何日過ごしたんだろう？



## 第十六話 修学旅行1・・・京都へ

### 第三部

#### 第四話 修学旅行1・・・京都へ

）朝倉和美

いやー、驚いたのなんのって。

新幹線で蛙の大打進やら、怪しげなお猿の着ぐるみ女が現れたりとか、もうひっちゃかめっちゃか。

そんな中で、世界の隙間というか、裏側って奴側かっついまった。

事の起こりは京都に着いてから。

何かと野良猫がネギ先生に懐いていたんだけど、そのへんは昔からだってアスナの話。

で、宿に着いてから取材用の写真を撮ろうとろろろしていたら見てしまったのだ。

エヴァちゃんとネギ先生の絡みを。

宿の一室で、ネギ先生の首筋を攻めるエヴァちゃん。

上気しつつ声を押さえ、必死に顔をゆがめるネギ先生。

やべえ、これ撮らなくちゃ。

反射的に撮影したところで居場所がばれてしまい、そのまま別の部屋に連行されてしまった。

で、集まったのは

アスナ

コノカ

刹那

エヴァちゃん

チャチャマル

タカミチ先生

……なんだろう、この收拾がつかなさば。

で、いろいろと検討されたらしい結果は、真実の告知だった。

この世に隠れる魔法、そして隠れて行使する人々。

で、ネギ先生はその魔法学校の研修でウチの先生をしているそう  
だ。

エヴァちゃんは何と「真祖」と呼ばれる最高位の吸血鬼で、バカ  
ピンクをおそつたのも実はエヴァちゃんだそうだ。

ただ、そのかわりにその身を捧げたのがネギ先生だという。

で、それが、あれ？

「「「「こくこく」「」「」

で、ここにいるのは魔法側？

「「「「こくこく」「」「」

「……私もそつちに行きたいかなー？」

みんな顔を見合わせる。

くネギ

拝啓 父上様

朝倉さんが仲間になりました。

情報操作をしてくれるという事で、すぐ助かります。

加えて、姉さん・このかさん・刹那さん・朝倉さんと仮契約しました。

情報を秘匿する上で、必要だ、とコノカさんに力説されて、納得しましたが、これって広めてないでしょうか？

とはいえ、僕と相性がいいのか、みなさんに面白いアーティファクトがでるようになりました。

アスナ：ハマノツルギノハマノヤリノハマノユミ

姉さんの完全魔力無効化能力を武器にしたものです。

コノカ：オオハラエノイブキ

完全回復まで可能な治癒のオオギセットです。

セツナ：トツカノツルギ

神話時代の剣だそうです、霊格・霊位ともに神様レベルの剣だそうです。

カズミ：ワタリドリノコドモタチ

地球の反対側にとばしても遠隔操作できる使い魔12体のセットで、視覚聴覚どころか映像も引っ張り出せるそうです。

エヴァンジェリンさんは朝倉さんとヒソヒソと話し合い、最後に

は握手していましたが、何だったんでしょうか？

くコノカ

うひゃひゃひゃひゃ、ネギ君の唇ゲットやー！！

かわええタロットも手に入っだし、もう今日で修学旅行終わってもええなー、なんて思ってまう。

思わずお母様への定期通信で、そんなことを漏らしたところ、向こうでは血の涙がでるほど悔しがってくれたんよ。えへへへへ。

さすがに立場が危ういので、秘蔵の動画を送ってみた。

エヴァちゃん経由で例の吸血契約の時の動画なんやけど、内容はやばやばや。

へたなAVなんかメじゃあらへん。

委員長なんかに見せたら昇天やな。

てなわけで、お母様がみたところ、七穴憤死したそうや。

さらには天井を突き破るほどはねたそうや。

さすがお母様、体はっとなるなー。

とはいえ、さすがはネギ君。

ええ仕事しとなるなー。

## 第十七話 修学旅行2・・・真実へ

### 第三部

#### 第五話 修学旅行2・・・真実へ

ゝのどか

昨日の夜、ユエやハルナに背中を押されて、ネギ先生を私たちの班の自由行動に誘えました。

みんなで行動できるのもうれいし、ネギ先生と行動できるのもうれしくて、ちよつと浮かれてました。

それで、みちゃったんです。

みんなが、アスナさんやコノカさんがネギ先生とキスしているところを。

そして、そのキスで不思議な光に包まれているところを。

私は本当は怖かったのに、うらやましくてうらやましくて動けない状況になってしまいました。

だからいま、ネギ先生が隣にいるというのに、ぜんぜん楽しい気分になれていません。

でも、せつかくだからとがんばってるんですけど、心が浮き立とうとしません。

そんな私の様子に気づいてか、みんなから離れるように私を誘導してくれて、今では先生と私だけで御茶屋にいます。

何も聞かず何も語らず、ただ笑顔で接してくれる先生に、私は思いきって聞いてみました。

昨日は何をしていたのか、あのキスが何なのか、を。

ちょっと驚いた風の表情の先生でしたが、すぐに落ち着いた顔になり、私を見つめてくれました。

「のどかさん。のどかさんには今三つの道が示されています。このまま何も聞かず忘れるという道と、話を聞いて納得できないから忘れるという道と……」

すっと息と止める先生。

一度眼を閉じて、再び私を強く見つめる先生は静かに良いました。

「……すべてを受け入れ、すべてをうべなう道です。」

くカズミ

驚いたことに、本屋ちゃんはその時の儀式をみていたようだ。

それ以上に驚いたのは、ネギ君が巻き込む気満々なことだった。

ネギ君が本屋ちゃんに示した選択しの三つに二つがすべてをはなすという選択肢だったし、その上で判断できると聞けば知識に飢えた本屋ちゃんが聞かないはずがないのだ。

「ま、まずは聞かせてください、全部」

やっぱり。

同じ映像をみていたアスナたちも唸ってる。

観光優先のエヴァちゃんたちの先導でユエ吉たちはそのまま観光しているが、魔法関係というか仮契約した私たちは興味津々だ。なにしろ私たちのキスをみられていたんだから。

「……わかりました。」

そう言ったネギ君は、ちらりと私のアーティファクトをみる。つまり私にも聞け、ということだろう。うなずく私の気配を感じてか、ネギ君はゆっくりと語り始めた。

「アスナ

魔法の秘匿は重要だけど、優秀な人間の発掘も重要だ。

魔法世界に関わっていない人間でも魔法世界での活躍が期待できる人間は多く、そんな意味では3-Aはそういう人間を集められた実験教室みたいなものだった。

だから、あらかじめ魔法の素養があったり、親和性が高肩利するわけだけど、本屋ちゃんは格別だった。

ネギから聞いた魔法の世界の意味と現実を聞き、その上で危険性を自分で考えてネギに問いかけた。

「……この危険性こそが、ネギ先生のおそれることですね？」

私もコノカも大いに感心し、朝倉はちょっと顔をひきつらせていた。

「まいったね、裏社会って思ってたけど、結構ハードボイルドだねえ。」

「今から後悔しても遅いわよ？ 朝倉」

「はん、怖じ気付いたけど、後悔なんかしないって。真実がそこにあるなら、そこまでいく、そう決めてんだ」

頼もしい限りだ。

「おおっと、本屋ちゃん、覚悟決めたっばいよ。」

彼女の選択は、魔法を受け入れ、世界を受け入れ、そして危険もすべて受け入れて、世界の真実にふれる、だった。

その先の命も人生もかけるに亞違う真実だと彼女は言い切った。

その言葉に苦笑いのネギ。

ネギの立場では早すぎる決断といえないのがモドカシいのだろう。なにしろネギもすでに密を決めているのだから。

そしてその道を決めたのが、遙か昔、五歳のころなのだから。

「・・・わかりました、のどかさん。あなたの決断を受け入れます。」

そつと頬に手を差し込んだネギ。

このへんは父親アイナににてるんだよねー。

女誑しっぷりが。

「わぁ・・・可愛いタロット」

仮契約とともに現れたタロットはネギの力もあってか、アーティファクトを召還できるものだった。



「……！」

朝倉の瞳が細まる。

「アスナ、エヴァちゃんたちに正体不明の襲撃……ユエ吉たちも巻き込まれてる！」

私は仮契約カードを通して全員通達。

魔法に関わる仲間たちに、集合をかけたのだ。

ノドカ

それは、ゲーム中の出来事のように、アニメ中の出来事のように、現実起きた本当のことでした。

魔法が存在することもそれで悪いことをする人もいる。

マジステルマジ、正義の魔法使いと呼ばれる人たちが魔法に関係ない人々も含めた世界を救おうとしている。

ネギ先生は、マジステルマジに、いいえ、魔法を正しく使い、手の届く範囲を救いたいと願い立ち上がった少年でした。

家族を、兄弟を、そして自分の生徒を救うために、全力を尽くす。姉であるアスナさんも、コノカさんも、朝倉さんも、みんなネギ先生を支えようと立ち上がっていました。

私も、微力ながら、いいえ、言い訳なんかしません。

持てる力を使って、先生を支えようと思います。

思いますが……

「……ねぎせんせい……お姫様だっこはどうかと……」

アスナさんが朝倉さんをだっこして、コノカさんを背負ってすいジャンプを繰り返して疾走しています。

残りの私を、ネギ先生がお姫様だっこで疾走中。

魔法関係者は、こんな体力が必要なんでそうか？

「じつとしてくださいね。」

にこやかな笑みを浮かべたネギ先生は、高い高いジャンプをした後、宙にとどまりました。

いつの間にか現れた杖、まるでRPGの魔法使いが持っているような、そんな杖の上に立っているのです。

「ねえさん、こっちへ。」

「さんきゅ、ネギ」

私たちは風を切ります。

カンフー映画の主人公たちみたいに、一本の杖の上に立った二人を乗せて。

## 第十八話 修学旅行3・・・実家へ

### 第三部

#### 第六話 修学旅行3・・・実家へ

「エヴァンジェリン

ユエ、ハルナという魔法一般人を引き離すということは、たぶんノドカを引き込むつもりだろう。

まったく、あの小僧、結構やり手ではないか。

「ねね、エヴァちゃん。」

「つつつとよってきたハルナ。」

「もしかして、ノドカがネギ先生にラヴなのわかってる?」

「あれほどあからさまなのに、解らんはずがなかるう?」

「そうですね、あからさまです」

私と茶々丸の言葉に、ハルナはうんうんと頷いた。

ユエはちよつと思案している様子だ。

「・・・エヴァンジェリンさん。お聞きしてもいいですか?」

「なにを聞きたい? 対価次第で答えてやらんこともない」

その一言に目を輝かせる綾瀬夕映。

ふむ、何かを掴んでいるな?

おもしろい。

「で、「こんなところ」で聞きたいことか？」

不意に周囲をみた後、宿に着いてからお話を聞かせてください、と囁く様にいう。

つまり、そういうこと、なのだ。

ふっふっふ、楽しいじゃないか、ネギ坊主！！

「マスター。何者かが私たちをつけています。」

「朝倉の使い魔じゃないのか？」

「いいえ。それ以外の敵が20ほど。」

「・・・協会か？ 正義の魔法使いか？」

「不明です」

ふむ、いつちよバラすか？

「マスター、その判断は早計です」

すでにタカミチへ連絡が行っているそうで、早々に駆けつけるだろうということだ。

とはいえ、それなりに相手せにやらんדרוף？

「・・・イエス、マイマスター」

さあ、愚か者たち、よく聞け。

魔法なしでも私は強いぞ？ 絶望的にな。

く 刹那

私たちが到着したそのときには、すでに事はすんでいました。

圧倒的な武を誇るエヴァンジェリンさんが付いている時点で心配などないともいえるのですが、私たちが到着した時点で尋問まで完了しているとは思いませんでした。

背後で涙目のハルナさんとユエさんがいますが、一応無視の方向で。

「マスター、ありがとうございます」

「なに、暇つぶしだ。・・・おまえもこのぐらいは出来るだろう？」

「いいえ、マスターのように痛みも与えずに拷問することは出来ません」

ふふ、と笑う顔が結構邪悪です、ネギ先生、エヴァンジェリンさん。

「なーなー、せつちゃん。襲撃者に見覚えあらへん？」

さすがこのちゃん。やはり気づいていたようです。

私が見る限りでは、関西呪術協会の幹部クラスが大半です。

装備を教会仕様に偽装はしていますが、その程度は見破れるのです。

「せやと、お母様がからんどる？」

詠春様ですと、ぎやくに東の者に偽装するかと。

「・・・つまり？」

教会と事を構えても痛くも痒くもないと思いきんでる組織上部の

一部バカであることは間違いないかと。

「はあ、お母様も存外だらしないなあ。」

このちゃんはため息一つでネギ先生に耳打ち。

先生も真剣な顔でうなずき返しました。

「……みなさん、この騒ぎを宿まで持ち越すことは出来ません。申し訳ありませんが、コノカさんの御実家まで一緒にしてください」

さてさて、ハルナさんやユエさんをどうするか、興味ありますね。

くネギ

緊急避難と言うことで、このかさんのご実家に伺うことにしました。

タカミチも賛成してくれたので、学校側の根回しをお願いしていきます。

で、ハルナさんとユエさんには、ノドカさんと同じく正面から話してみました。

そしてノドカさんが感じた生命の危機と後戻りできない道について。

忘れることは出来る、離れるところも出来る、その選択肢を示しましたが、二人の答えはノドカさんと同じでした。

「私たちに選ぶ道を示すのは覚悟のためではなく免罪符の意味が大きいです。自己満足のための説明なら受けますが、引くの望むなら問答無用で記憶を消すべきです。」

ユエさんはこわばった顔で僕を説きます。

「ネギ先生。私たちのような年齢の少女が、こんな世界を見せられて引けるはずがありません。生き死になんて実感のない概念すら性格に把握できない子供に、魔法なんておもちゃを見せたのが運の尽きですよ。」

「そうだね、そのとおりだともうよ、あたしだって引けないしね。魔法なんて世界を教えてくれるなら、この身だって惜しくないって思うよ?」

完全に攻めの姿勢の二人を僕は受け入れました。

仮契約が終わったそのとき、屋敷を震撼するような大音量が響きわたりました。

それが始まりだったんです。

## 第十九話 修学旅行4・・・討伐へ

### 第三部

#### 第七話 修学旅行4・・・討伐へ

「アスナ

それは突然だった。大広間で夕食をご馳走になっていたときにそれは起きた。

視界の範囲いっぱい広がる魔法陣。

その魔法陣へ大量の魔力が注入されてゆくのがよく解る。

「来たれ（アデアット）！」

私は呼び出したハマノツルギを一旋する。

魔法陣は一瞬で瓦解したが、魔法自体が発動してしまったためか、一部の人たちが石化し始めた。

「アスナちゃん、娘を・・・！！！」

高速で石化する詠春さんを（役に立たないわね！）と、ひと睨みして私は走る。

奪われたコノカを追って。

「エヴァちゃん付き合ってくれろ！？」

「弱いものいじめはスキだぞ？」

「私はマスターに従います」



よし、最大火力調達完了。

「アスナ姉さん、これは!?!」

「悪いやつがコノ力をさらった、私たちで叩き伏せる。以上、なに  
か質問は?」

「質問はありませんが、提案があります」

「なに?」

「増援を呼びましょう」

よし、流石私の弟!!!

くマナ

そこは戦場だった。

ネギ先生からの要請とタカミチ先生の許可によって、私、クーフ  
エイが現れたそこは、恐ろしいまでの数が召喚された鬼達の集団と、  
それを迎撃するネギ先生たちだった。

前衛をアスナを刹那が勤め、中距離の迎撃を茶々丸、そして広域  
攻撃をエヴァンジェリンが行うという、完全攻撃特化型パーティー  
がそこにあつた。

「前衛に割り込むアルね!!!」

魔法に関わっていない人間としては最強レベルのクーフエイが入  
れば、前衛に余裕ができるだろう。

ならば私は後衛および迎撃だな。

「待たせたな、ネギ先生!!」  
「助っ人参上アルよ!!」

周囲を一掃する私たちに微笑みかけるネギ先生。

「小僧! ここは私たちが抑える。早くお姫様を迎えにいけ!!」  
「・・・はい、<sup>マスター</sup>師匠!!」

ふわりと虚空に消えたネギ先生を見送った後、私はエヴァンジェリンに並ぶ。

「・・・ネギ先生は、エヴァンジェリンに弟子入りしてるのか?」  
「ふむ、できのいい弟子だぞ?」  
「・・・ずるい、な。」  
「ズルイ、アルね」

ズババババンと一掃する私たち。

「何がずるいというのだ。」

「そんなお楽しみ、私たちにも分けるべきだ」  
「そうね、これからは体術も必要ね!!」  
「銃も必要だろう!!」

激しい攻撃を見たエヴァンジェリンは微笑む。

「なんだ、貴様らも小僧で遊びたいだけではないか?」  
にやりと笑うエヴァンジェリンは、ふわりと中に舞う。

「よかるう、この戦いで武を示し、小僧に弟子入りさせることがで

できれば、一緒に遊んでやろうではないかあ!!」

ぶわつと巨大な魔力が放たれると、目の前の広域が消え去った。

鬼達も戦く。

自分達が相手しているやつらは唯の人間ではなかったことに、今更ながら気付いたのだった。

「ハルナ

猛攻、なんて言葉はこんな時に使う言葉だと実感した。

あの時得たアーティファクト「落書帝国（IMPERIUM GRAPHICES）」は、私が生み出した絵たちをそのままに現実  
に持ってきてくれる、正に「魔法」だった。

そんなわけで、私が護衛ゴーレムを何体か作り、ノドカが周辺警戒。そしてユエのアーティファクト「世界図絵（ORBIS SENSUALIUM PICTUS）」で情報収集と敵対情報の探索、弱点などを調べていた。

コンビネーション自体は図書館島探検部での連携そのままだけど、みんながみんな魔法使いの弟子って言うのも面白すぎる。

「ハルナ、そろそろ時間です!」

おおつと、新しく護衛を書かないと。

私のアーティファクトには、結構しゃれにならない時間制限がある。

あと、いちど引つ張り出すと、書き直さないといけない。

これは絵描きへの挑戦とも言えるアーティファクトだといえるだろう。

「いでよ、炎のアニキ、五体!!」

「ハルナ、ユエ、湖のほうがへんだよ!？」

見れば湖の中心がかなり光ってる。

うわー、ネギ君失敗した？

思わず双眼鏡を引つ張り出すと、そこには血を吐いて倒れるネギ君の姿が・・・

・・・やばくね？

「ハルナ、増援頼む!!」

どこからか朝倉の声が聞こえる。

「解った!!」

私は練りに練って絵を完成させる。

その時間わずか10秒!!

「いでよ、盾の乙女!!」

望遠鏡の先では、ネギ君を中心に、デザイン化された盾の乙女が攻撃の全てを防いでる。

「もっても5分、後は頼んだよ、朝倉!!」

「わかった!!」

さーて、私たちは後方霍乱かな？

くネギ

油断をしていました。

いいえ、何も考えていなかったといったほうが正しい状態でした。あのコノカさんの形のいい「おっぱい」を、なんの気遣いもなく握る目の前の少女に。

あの柔らかなで将来性抜群で、いいにおいのするコノカさんのおっぱいを握る、憎き白髪の少女に。

ボクは全力を使いました。

ですが、それすらも白髪の計略で、影を伝って転移してきた石の柱に僕は貫かれてしまいました。

焼けるような痛みと灼熱の後悔を無理やり押し流し立ち上がると、なぜか僕の周りに魔法の盾が現れました。

この気配は、ハルナさん!!

そうだ、ボクは一人で戦っているわけじゃなかったんだ、と当たり前のことに気付きました。

ゆっくりと怒気がおさまり、そしてボクは一步踏み出しました。

白髪の少女はニヤリと笑い、ふたたびコノカさんの胸に手をのばした瞬間、ボクは影を渡る。

「・・・なっ!!」

全力で拳を叩き込み、コノカさんを抱きしめたまま、僕は下がった。

「姉さん、後は頼みます!!」

「まかされたわよ!!」

柔らかでイイ匂いのするコノカさんの胸にボクはうずもれたまま  
意識を失いました。

## 第二十話 修学旅行5・・・別荘へ

### 第三部

#### 第八話 修学旅行5・・・別荘へ

春日美空

怪獣大決戦。

いまやまじだって。

シスターシャークティーとエヴァンジェリンさまの命によりストーリー業務を続けてるんだけど、なんつうかハリウッド目じゃねえし。

刻一刻と石化してゆく人々。リアルタイムに写しちゃったよ、こえーけど。

バンバン現れる召還鬼族。

迎え打つ武闘派軍団。

地味ながらかなりの戦果を挙げた新人従者戦隊。

そして敵に打ち取られつつ、死力を尽くして敵を討ったネギ先生。やべーって、まじヒーローだよ。

カメラのこつちでマジなきしてんもん、あたし。

で、その映像をシスターに送ったところ・・・

『明日、ネギ君は赤き翼の別荘に行くそうです。紛れ込みなさい』

おいおいおいおい、いいのかよ、おい。

まあ腹芸は面倒なので、正面から聞いてみたら、エヴァンジェリンさまがフォローしてくれた。

「美空は魔法生徒のなかでもかなり頼りになる奴だ。今回の戦闘映像もとっているしな。・・・後で見せてもらえ。」

「はい、<sup>マスター</sup>師匠！」

そんなわけで、伝説の戦闘旅団の別荘に行くことになりました。・・・まあ、ちよつと興味はあつたんだよね。

くアスナ

ここに来たのは何年ぶりだろう。  
感慨深くドアを開けようとしたところで、向こうから開いた。  
そこにいたのは・・・

「ナギかあさん、アリカかあさん・・・」

「よ、久しぶりだな」

「元気だったか？ アスナ」

きゅつと私を抱きしめる二人だったが、しゅるりと姿勢を変える。  
そのまま、ツインブレンバスター！！

「にぎやーーーーー！！！！！！」

床にたたき伏せられて、私の意識は遠く消え去った。



くノドカ

話には聞いていたけれど、アスナさんやネギ先生のお母さん達はスゴく綺麗でした。

痩せ意味が溢れる超美人、ナギさん。

まるで王侯貴族のようなゴージャスな美人、アリカさん。

そんな二人に私たちは別荘を案内してもらいました。

「あ、これえ、お母様のお若いときですねえ？」

そこに写る写真を見て私たちはアレコレと盛り上がります。

そう、コノカさんの母上も、ネギ先生のご両親も、みんな写っている写真でした。

「あ、あの、これ、スキャンしてもいいいですか？」

美空ちゃん言葉にうなずくお二人。

スゴい勢いでどこかに言ったかと思いきや、戻ってきたときにはかなりの枚数のコピー用紙を持ってきていた。

そこにはすでに拡大コピーした写真が写っていて、希望者に配るようにしたそうだ。

「ネギ君のお父様って、このかつこいい人ですか？」

そんな朝倉さんの一言に笑顔のお二人。

「お、君の名は？」

「朝倉和美です！！」

「朝倉さん、きみは男の趣味がいいな。」

「ふむ。よい趣味だが……」

『ネギを落とすのは五年待てよ?』

「……あはははは、委員長じゃあるまいし」

そっか、五年待てばいいのなあ。

く  
ネギ

僕たちは、お母様達が入っていない写真を撮りました。  
その写真を父上様に送ろうと思います。

コレが、僕の仲間達ですって。

コレが僕の守るべき生徒おっばいですって。

## 第二十一話 第三部のエピローグ とうか 四部のプロローグ

### 第三部

#### 第九話 エピローグ とうか 四部のプロローグ

くネギ

・・・師匠が増えました。

魔法は今まで通りにエヴァンジェリンさんが教えてくれるのですが、武術をクーフェイさんが、銃などの武器全般をマナさんが教えてくれることになりました。

こんなに一度に覚えようとしたら壊れちゃいます、と言うと、なぜか三人の師匠が鼻を押さえてフラツいていました。

なんででしょう？

ともあれ、手の届く範囲すべてを守ろうというのならば、あらゆる手段を持っているべきだというお話は理解できたので、こちらからお願いすることにしました。

修行の大半は魔法球のなかでしているのですが、最近になって魔法球の外に「梁山泊」って書いてあるのは何でしょう？

あと、最近三人の師匠が「最強の弟子」とかいう単語をぼろぼろ言っているのが気になります。

・・・ちよつとだけ怖いんですよ、ええ。

第二十一話 第三部のエピローグ とうか 四部のプロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか、第三部でした。

ちよつと今回はキャラが多くて「おっぱい」少な目でしたが、鼻血は増量しました。えっへん。

第四部は悪魔来襲と学園祭なんですが、もしかすると四部悪魔来襲・五部学園祭になる可能性があります。

では、次回更新をお楽しみに〜

第二十二話 史上最強の弟子（笑）（前書き）

色々書いてみたのですが、学園祭と悪魔は分けることにしました

w

## 第二十二話 史上最強の弟子（笑）

### 第四部

#### 第1話 史上最強の弟子（笑）

「アスナ

「いやあ、あいつよくやってるわよ？」

一日二四時間しかないところを、七十二時間ぐらい使って修行してるし。

それも全く違う方向の全く違う修行を毎日毎日。

そのせいでメキメキ実力が上がっていった、今じゃ刹那さんとあたしを同時に相手して引き分けたり勝ったりするんだから恐ろしい。

魔法がきかない私には武術と武器、逆に剣技で勝る刹那さんには魔法と武器。

非常にやりにくかったと刹那さんも笑っていた。

近代兵器と魔法や武術の融合って、結構難しいはずなのに、わりと楽々とやっている気がしたんだけど、舞台の裏側の師匠軍団は、毎日地の会議を繰り返しているのを見た。

「だからちがうといっておるだろう！ 萌の基本は「ちらり」だ！  
！ もろみせなど邪道ううう！！」

「まてまてまて、何ももろミセがいいとは言っていない！！だが、彼の場合は無防備、これが萌だろう！！」

「エヴァ、マナ、わかってないネ！！ 双方あわせ持つ、これがネ

ギ坊主の武器。真骨頂ネ！！」

「「おおおおおおお！！！！」」

だめだ、もしかしたらネギ、汚されちゃうかも。

そんな危機感もあり、私はネギの修行に参加したんだけど、一緒に従者チームも鍛えようと言う話になった。

で、参加して大後悔。

魔法球二日目で死ぬってこの意味を思い出した。

この絶望感ってなによ？

で、その絶望に立ち向かううちの弟って何よ？

ほんと、あの時にネギがいれば、もっと楽勝だったんじゃないかしら？ なんて考えてしまう自分を叱咤する。

違う違う違う、私は何を考えてるんだか。

あいつのことだから、他人が正気を失うような努力をさらにしているんだ。

正面からきけば冗談のような、真剣にきけば絶対止めなくちゃいけないような努力って奴を。

だから私も信じる。

あいつがしている努力って奴が無駄じゃないって。

くコノカ

毎日ふらふらになるまで修行してるネギ君に何かしたいなあ、っ  
ておもってたら、ノドカとユエがネギ先生をマークしてほしいって  
頼んで来よった。

無茶しとるネギ君を労りたいんやなー、と思って、警戒しとった  
ら、スゴい早起きをしたのに気づいた。

メールやメール。  
がんばりや〜。  
うちもナンかしよー。

くユエ

えー、後悔先に立たずという有名な言葉がありますが、実際に体験するとそれなりに感慨深いわけでした。

目の前の絶望的状况とか生死判定に関しての細かな設定とか、もう全てがリセット状態です。

試しにアーティファクトで調べてみましたが、目の前の存在がわかりました。

いわゆる、「竜」族。

ドラゴンと呼ばれるものの中では下級ながら、一人が向き合うには荷が勝ちすぎる相手でした。

となりのノドカは既に壊れているようで、「デイジーデイジー」と呟いています。

もう、ドラゴンのお食事になるしか、と覚悟を決めたそのとき、ネギ先生が飛び上がりました。

まるでワイヤーアクションの様に飛び上がるネギ先生は、右の手のひらをドラゴンの胴体にたたきつけました。

それはまるで「爆熱ゴトフィンガー」のように！！

その衝撃に身を引いたドラゴンは舞い上がります。

それを追いかけつつ、再び「爆熱ゴトフィンガー」！！

空中でよろめくドラゴンから身を引いて、ネギ先生は杖を片手に私たちを回収します。

流石のネギ先生でも、ドラゴンは倒しきれなかったようです。



図書館島から撤退中に私は聞いてみました。

「どこで先生はゴットフンガーを体得したのですか？」と。  
すると先生は微笑みながら言います。

「あれは技ではありません。心からの愛を相手に贈っただけですよ。」

ラブラブですか、ラブラブですね！！  
石を破壊し、天が驚く、あの愛ですね！！

恐れ入りました、本格的にそちらの世界に入らねばならないようです。

くネギ

ドラゴンが雌でよかった。

正面に相対した瞬間、ボクも死を覚悟しましたが、急に修行を思い出しました。

相手の体貫をとらえる。

動物の動きの大本を見極められれば、人と相対するが如くの効果を得られる。

幻想的は話ですが、幼い頃に出会った女悪魔のことを思い出しま

した。

人に近いものは人に近い弱点を持つ。  
人から遠くても人に見立てた弱点も存在する。

そう、人に見立てることができたなら！！

パニック症状のユエさんとノド力さんを背に僕は集中します。

そう、人と見立てればいい。

幸い、相手は二足二腕で頭は一つ。

そして、「雌」！！

雌と言えば、「女性」！！

女性と言えば………

おっばい！！

そう、子を産み育てる存在ならば、たとえ卵生生物であっても哺乳類でなくても「それ」はある！

集中しろ、研ぎすませ、僕のセブセンシズおっばいかんかく！！

内側から燃えさかる炎のような魔力が、僕にそれを見せました。  
そう、貴女の弱点おっばいはそこだ！！

魔力もなく、攻撃力もない手のひらが、ドラゴンを怯ませます。  
ドラゴンの言葉は判りませんが、おっばいの事なら判ります。

(な、何なの、この感覚!?)

おっばいですね、おっばいが語っています!

いかに言語が通じなくても、おっばいが語るのです!!  
父上様、とうとう僕もこの段階まで来たんですね!?

(この人間、なんだか怖い……。)

いいえ怖くないですよ、いいえ恐ろしくもないんです。  
ただあんたは受け入れればいいのです!!

(い、いやー、この人間イヤー怖い怖い怖い)

おおっと、乙女を怖がらせるのは本意ではありません。

そんな訳で大切な生徒おっばいを抱えて図書館島を後にしました。

これだけ怖い目に遭えば魔法に関わるのをやめるかと思いきや、  
二人とも非常に熱心にエヴァンジェリンさんの別荘に通うようにな  
りました。

「シャイニングフ ンガーから体得したいお思います」

というユエさんの台詞は謎ですが。

くエヴァンジェリン

学園長ユエの話では、ネギがドラゴンと対決したそうだ。

さすがの勝ちはしなかったそうだが、どうにかこうにか無傷で逃げ出したという。

足手まとい二人を連れてと言うのだから恐れ入る。その時のことを直接聞いてみると、

「<sup>マスター</sup>師匠の教えを守り、最大攻撃前に懐に入りました」

うんうん。

「老師の教えを守り、体貫を通して弱点が探れました」

「よくやったアル。」

「教官の教えのおかげで、相手の攻撃タイミングが判りました。」

「うん。よいことだ」

「みなさん、ありがとうございました。」

「」「うん、これからも精進しろ」「」

「はい！」

いやー、弟子いいわ、弟子。萌えるわ。

「うん、いいアルねえ。」

「ふむ、今まで感じたことのない快感だな」

「これはあれだ、ほら、光源氏」

「ほほー、エヴァ殿もなかなか。」

「なにアルか、それ？」

「そうだな、子供のうちにいろいろと教育して、自分好みの伴侶に育てるとい話だ。」

「……鼻血でそうアル。」

「……まさに、今の状況だな」

じゅるりと口元を拭う私たち。

「まあ、何にしても、ネギの生長も面白いが、従者たちの成長もナカナカではないか？」

私の言葉に二人も同意。

これは本気で鍛えてみる方が面白いかもしれないと思う私たちだった。

第二十二話 史上最強の弟子(笑)(後書き)

えー、当然のようですが、みんな壊れています。ええ。

## 第二十三話 全て遠き理想郷（アヴァロン）

### 第四部

#### 第2話 全て遠き理想郷アヴァロン

犬上小太郎

里を抜け、俺がこの東京まできたのは、ある情報をとらえたから。  
あの天才が、この地にある、と。

昔、俺は最低最悪の思い上がりだった。

が、あの書と出会って俺は変わった。

自分がいかに視野が狭く、独りよがりだったかを知ったから。

自分の至宝ともいえる「世界胸見聞録」「悪魔の胸」の二冊を抱えて俺はこの地を走る。

「……ぜってーサインをもらったる、ネギっスプリングフィール  
ド……」

共同著作とはいえ、かのおっぱい聖人アイナっシユトルムシユルトに認められたその才能と実力には嫉妬を感じないわけではないけど、それでも僅か五歳の頃にあの境地にたどりつけた才覚には素直に頭を垂れるしかない。

俺らおっぱい星人は、格上の人間には素直に頭を垂れ教えを請うことができる、その謙虚さがもつとも求められる資質だ。

とはいえ、東京都言っても広すぎる。

どこに行けばいいのやら……。

「・・・いや、考えるまでもないやないか。」

おっぱいを知るもの、最良の地にいるに違いない。  
そんなわけで、俺は東京中の女子学校を探り始めた。

検索範囲を関東圏全般まで広げたとこでヒットした。  
マホラという学園都市の女子中学校で活動していることが解った。  
同士の情報網では、なんと僅か10歳ながら教師をしているとい  
う。

すげー、ネギっスプリングフィールドすげー。

なんつっても女子中学生、成長加速の頂点。  
体質によりいろいろあるが、この時期に食・体操・運動を支配で  
きる立場となれば、どんな調整も実行可能だ。

いかなるナイペタンであろうとも、小ぶりまでの進化が可能だ。  
いや、ネギっスプリングフィールドならば出来るはずだ。

いやいや、実行してはいてくれるはずだ！！

是非とも俺にも見せてくれ、その完成されつつある作品を！！  
おっぱい

く村上夏美

チツねえが買い物当番で忘れたものを、何で私が買いに行かない  
といけないかなあ、とおもったけど、チツねえがボランティア、委  
員長には無理となるとどうしようもなかった。

まあ、明日でもいいんだけど、こういうものが足りなくなるとみ



んなが迷惑するし、自分も暇だし、ね。

買うものかって帰ろうかとしているところで、ベンチで寝ている少年を発見。

小学生っぽいんだけど、ちょっとやんちゃな感じ。

でも、何となく、こう、弱ってる感じ？

「・・・大丈夫？」

声をかけると、ちょっとだけこちらをみて、微かに頷いた。

「・・・大丈夫や、ねてればなおる・・・」

絶対信用できない、そんな風を感じる声だった。

だから私は問答無用で熱を計り、そして決断した。

どこか、保健室とか、そういうところへ！！

・・・って、あれ！？

熱をみるために手を当てていた少年は消えて、その手の中に子犬がいるだけだった。

子犬なので仕方なく獣医につれてゆくと、自分の飼い犬ではないことと野良でも面倒をみたいという私の気持ちに免じて安くしてくれた。

今は私の腕の中で寝息をたてる子犬がいるだけ。

ベンチの上にあった服も仕方なく回収して、今は寮に連れてきてしまった。

いろいろと疑問はあるし、納得は行かないけど、あの少年は多分この子犬なんだろうと思う。

正体不明だし変だとは思うけど、私はこの子を助けたいと思ってしまった。

なんでだろうね？

↳ 那波千鶴

夏美が犬を拾ってきたと聞いたので覗いてみたら、裸の男の子でした。

・・・やるわね、夏美。

女子寮に男子を連れ込んだ上で、男子全裸。

予想の斜め上をいく夏美の成長に、チツねえ感激。

「と、いうわけで、ごゆっくり〜」

あやかにはうまいこと言っとくわ〜  
換気を忘れずにね〜

「チツねえ、まって、誤解〜〜〜〜！」

事情を説明されて流れは理解できたんだけど、現実の事態は近い  
不能だった。

男の子を助けたつもりが子犬になってて、獣医に連れて行って寮  
に戻って、しばらくしたら男の子に戻った。

ここに男の子がいなければ幻覚や夢のたくいと割り切れるんだけど、  
実際に男の子がいて、更に犬耳犬尻尾が直接出ているとなると  
認めざるを得ない。

この変な少年は、なんだか不思議な存在だ、と。

「とりあえず、熱は収まったのね？」

「・・・うん。」

毛布を掛けて膝枕をして少年を撫でる夏美は、いつもと違って大人びたものを感じる。

もしかして私がとし相応にみられないのは、ボランティアなどで子供の相手をしているせいかしら？　なんて事を思わせるほどだった。

『ぴんぽーん』

滅多に鳴らないドアベルが鳴る。

「誰かしら？」

「誰でもいいけど、さすがに」「これ」は見せられないよぉ」

確かにそうね。

そんなわけで、夏美ごと毛布をかぶせた私はドアを開く。そこには何とというか、形容に困る女性がたっていました。美しい見た目と裏腹に、何やら邪悪な。いいえ、見た感じはシズナ先生なのですが、ちこめる雰囲気ですべてを裏切っています。

「……あなたは誰ですか？」

一瞬きよんとした彼女は、ニヤリと顔をゆがめる。

「……へえ、さすがあの小僧の生徒、ってところだね。」

恐怖以上の衝動で後ろに飛ぶと、今まで自分のいたところに彼女の腕がありました。

まるで抱き込むような姿勢を見て私はほほえむ。

「あらあら、女性からのアプローチは間に合っていますよ？」

「……ふん、素人だと思って手加減していれば……。」

動揺、言葉にすればそんな態度であった。

ともなると、私たちの先生であるところの「小僧」、ネギ先生への牽制なのだろう。

あの方は幼いながらも教職で結果を残す努力家。

かなりの圧力や摩擦があることが疑いようもない。

「実に欧州風のやり方ですね？」

「はっ、小娘の分際で知ったような口を利くじゃないか。」

「ええ、小娘ながら、あなたのことを推理しましたのよ？」

私のような小娘だからと一気に勝負を決めない慢心、慢心からくる失敗を無視して無かったことにしようとする厚顔さ、そしてこの後に及んでも状況把握をしていないこと。

「……どういう意味だい、小娘……！」

「ごっつごっつちゃ……！」

私の横を通り抜けて全裸の少年が正面の女性を殴りつけた。

「……ぐはあ……！」

「ねえちゃんたち、捕まっちゃ……！」

全裸の少年に抱きかかえられた私たちは、寮の窓から飛び出して

いた。

あら、結構ときめく展開ね。

「ね、夏美」

「うきゅ〜〜〜」

ああ、夏美。気絶とは情けない。

この爽快感を、この疾走感を………

「「うきゅ〜〜〜」」

くネギ

魔法球マジックボールから出てきた僕に、学園長からの念話が届きました。

聞けば、僕の生徒おっぱいが悪魔に襲われたというのです。

被害者は夏美さんと千鶴さん。

……何とということでしょう、「成長加速」「安定栽培」の二巨頭を！！

許せません、許せません、あの二人の調整をすることにどれだけ時間をかけたかと思っっているのですか！！

「成長加速」以前の夏美さんは、「低空安定」タイプだったのを食事と間食と運動でやっと体質改善したというのに……！！

「安定栽培」に至っては、土壌となる筋組織が薄いために、胸が逃げ出してきたままっていたのです。

あれは惜しい、何ともつたいない。

逃げ出したものは脂肪として始末しなければならぬというのに……。

急遽、学園内の同士に協力を依頼し、千鶴さんのファンデーションの変更と外食時の摂取食料の調整を行い、どうにか急場をしのい

だというのに。

その二人を襲う、襲うですってえ……………？

「…………許せませんね。」

くアスナ

学園長室に急行したネギは、現状を聞き怒りに身を震わせていた。たぶん、まずい状態だと思い、拳骨投下。

「…………はう、痛いです、アスナ姉さん」

先ほどの雰囲気消したネギを私は睨む。

「憎しみはすべてを曇らせるわ。忘れたの？」

はたと、何かに気づいたネギは、大きくうなずいて見せた。

「姉さんはいつも僕に道を示してくれますね。」

「そんなんじゃないわよ。ちよっと方向修正しただけよ。」

私の言葉に明るい笑顔で返すネギだったが、急遽引き締まった表情で学園長に向かった。

「…………敵の目的は知れません。しかし、僕の生徒おっほいに手を出した報いは必ず受けさせます」

静かに拳を握るネギを見て、学園長もうなずいた。

「いいじやろう、本件はすべてネギ君に任せるとしよう。よいかな、ネギ君」

「はい、お任せください」

責任とかそういうものじゃなくて、ネギは守るために拳を握った。ならば姉としてフォローぐらいはしなくちゃイケナイだろう。

「・・・ネギ、私たち従者は・・・」

「姉さん、申し訳ありませんが、寮の方の警備をお願いします。再び狙われる恐れがありますから」

「・・・わかったわ。」

しかし、ネギ一人で魔族を退けられるのか？

「・・・自分にも手伝わせてんか？」

陰から現れた学生服の少年は、思い詰めた表情をしていた。

「自分が無理矢理学園の結界をすり抜けたせいやおもつ。そのせいで姉ちゃんたちが襲われたんや。責任とらせてや!!」

学園長はネギを見た。

「・・・あんな、あんな優しい姉ちゃんたちを襲った奴がゆるせん  
のや!!」

魂の叫びにネギは答えた。

右手を差し出すネギに少年は答える。

「……犬上小太郎や。」

「……ネギ」スプリングフィールドです」

「!!!!!!」

びくりと体を震わせた少年は、ネギの耳元にささやく。  
すると堅かったネギの表情が柔らかくなった。

「一緒に守りましょう、大切なもの（おっばい）を！」  
「ええで、あんたの夢、守ったる!!!」

瞬間敵に芽生えた友情を、私達は眩しそうに見つめるだけだった。



第二十三話 全て遠き理想郷（アヴァロン）（後書き）

何の前触れもなく小太郎君登場ですが、じっさいは昔から小太郎君はネギをリスペクトしていたのです。なにしろ、5歳にしておっぱい論文書きですからw

## 第二十四話 ゴットフィンガー（色々な意味で）

### 第四部

第3話 ゴットフィンガー（色々な意味で）

ユエ

ネギ先生の決意には胸を熱くさせられました。

私も最近収得した「シャイニングフィンガー」と共に参戦を決意したのですが、先生から寮の警備を依頼されました。

たしかに人質に取られれば、この上もない敗北を生み出しますが、戦力の分散は避けるべきでは？

「ユエさんたちの力は十分に魔物を倒せるものですが、魔族はその二階位は上です。」

なるほど、と納得せざる得ませんでした。

つまり石破天 拳に届かなくてはならないとは、さすがに今の段階では無理です。

ギアナ高地が私も待っているのかもしれない。

「ユエさんは自己制御がお上手ですが、その上を目指してください。ヒントは明鏡止水です」

「ほお、このちっこい姉ちゃんは「静」の武術家なんか？」

「いいえ、静の魔法使いですよ。」

「なるほどなあ。」

その「静の魔法使い」にどのような意味があるかわからないけど、私は心に刻みました。

『明鏡止水』

その心をと境地を。

く 犬上小太郎

雑魚を散々倒して突き抜けた森の先で、そいつはいた。

においも姿形も全くの別人であったが、あの女に違いなかった。いや、あの女というには問題があるだろう。なにしろ、相手は……。

「ああ、あの時の魔族さんですね？」

……なのだから。

「ネギ、もしかして、あの魔族は……」

「そうです、「悪魔の胸」の題材魔族ですよ」

「おおおおお！！すっげー！！！！」

「悪魔の胸」といえば、魔族の胸を数千の角度から検証し論理的形状とその実現性について言及した至宝の書だ。

旧世界出身の「おっぱい聖人<sup>セイント</sup>」であるアイナ<sup>セイント</sup>「シュトルムシュルトと共に、ネギ<sup>スプリング</sup>フィールドが共同著作したもので、おっぱいブリーダー達の目指すべき大地とまでいわれている物だ。

真名までは書き記されていないが、その魔族の体型及び特徴、蓄積魔力及び常時展開魔法、固有スキルやユニークスキル、ファン

ブルスキルまで明かされた内容は、おっぱいに興味のない魔法学者の間でも読み回されており、密かに信者を増やしているという。

それはさておき。

俺やネギの言葉に顔をゆがめる魔族は、泣き笑いのような表情。

「そうだ、それだ、そのせいで私がどんな目に遭っているかわかるかあ！……！」

聞けば、召還に応じても嘘胸呼ばわりされたり逃げられたり、大爆笑されたり写真に撮られて帰されたり。

実家でも両親は泣いているし、近所からは白い目で見られ、同級生達はすでに結婚して幸せになってるし、昔の彼氏から結婚報告の手紙が来たり、抜け毛が激しくなってきたし化粧ののりが悪くなってるし、なにもかもこの本が悪い……！！ と大暴れ。

あんまりだ、と大泣きに泣きながら。

「なんか、こう、魔族ってこんななんなんか？」

「聞いた話では結構魔族として演技してるらしいですよ？」

「そっかー、大変な仕事やなあ……。」

「そうなのよ！ 大変な仕事なのよ……！」

まるで飲み屋で絡む泥酔シ〇みたいや、と思った。

ノドカ

来ました来ました、敵来襲です。  
寮を守る前衛部隊、アスナさん、クーフェイさん、刹那さんが、  
無双状態で敵と思われる魔物を刈っています。

いや、本当に無双なんです。  
並みいる魔物をバツバツと薙払う姿は、まるでゲームのよう  
でした。

で、合わせるように龍宮さんが狙撃し、コノカさんが回復に集中  
しています。

「みなさん、そろそろ第二陣が追加です!!」

「了解（アル!）」

私はアーティファクトを駆使して敵の思考から情報を拾い上げて  
ミンナに伝えます。

直接戦闘力はありませんが、龍宮さんがずいぶんと感心してまし  
た。

そんな私を守ってくれるのが意外にもユエでした。

ユエはいつの間にか魔法拳士としての才覚を急速に磨き、様々な  
技を収得し始めていました。

「きたです、ノドカよけて!」

「うん、ゆえ!」

私が見え込んだ空間に、ユエが右手を走らせました。

「私の右手が光って唸る、敵を倒せと轟き叫ぶ!」

輝く右手に魔物が触れた瞬間、音もなく蒸発する。

「……シャーイニング、フンガー……!!!」

蒸発した先で重なるように存在していた魔物に、ユエは右手をたたき込んだ。

まるでその光を受けて蒸発するように消える魔物達。

「（ユエごめん、浸透されてる!）」

「（よいです、浸透はお任せください）」

「（たすかる!!!）」

アスナさんを念話をしたユエは、一瞬だけ人呼吸して敵に向かい合う。

「さあ、魔物達よ。わが武は未熟なれど、流派は王者の気風<sup>かせ</sup>。見事私を討ち滅ぼしてみるがいい!!!」

やだ、ゆえ、格好いい……//。

くネギ

一通りのグチを言い終わった魔族さんは、小太郎君からティッシュをかりて鼻をかみ、しきりなおした。

「……こんな不幸に陥れた小僧、きさまをゆるさない、ゆるさないからねえ……!!!」

とはいえ、その、なんです。

何と云ったらいいかわかりませんが、一応いわないといけませんね。はい。

「・・・僕からも言わねばなりません。」

そう、あなたの胸は間違っている、と！！！

瞬間、彼女の体が一步下がった。

反射的に下がったのでしよう。

「いきますよ、小太郎君」

「ええで、ネギ」

『我々で（俺らで）教育してあげましょう（）してやる（）』

「い、いやあああああああ！！！！！」

くエヴァンジェリン

駆けつけたときには終わっていた。

私やチャチャマルは間に合わなかったが、神映像の収集者「美空」は間に合っていたらしくカメラから目を離さずグットサインをこちらに向ける。

やはりシスターシャークティーの教育は行き届いている。

礼儀や道徳も大切だが、それ以上の神映像のためにすべてを集中

しつこくこちらにサインだけ送ってよこす気配りには恐れ入る。

視界に先にはグツタリと身を横たえた魔族の女がおり、それを見下ろすように二人の少年がハイタッチをしていた。

みれば上級魔族にあたるであろう魔力が存在していた残滓があるが、女魔族からは普通の魔法使い程度の魔力しか感じない。

「マ、マスター、キヨ、今回の映像は18禁風味です。」

いち早く映像を転送されたチャチャマルは、妙にうるたえていた。

「そ、そうなのか？ 美空」

美空が再びグツトサイン。

みれば彼女も鼻血を出している。

・・・かなり際物らしい。

「マスターもごらんになれば、わかります。」

いち早く撤収した我々は、同志シスターシャクティーとともに魔法球に籠もり、映像を吟味した。

魔法球ないで、三日ほどかかり、どうにか現実に復帰できた。

ボウヤ、いや、ネギィスプリングフィールド。

何と恐ろしい男に育ったんだ！！

同じぐらいの男と一緒に、魔族の女を押し倒し、悶絶するまでもしみだくとは！！

「いいえ、同志エヴァンジェリン。それはちがいます。」

「・・・なにがだ、同志シャークティー」



「あれは単純に揉みしだいたのではなく、改造が行われていたのです。」

・・・改造？

「はい、そうです。主に、霊骨格と仙骨の、です」

な、な、な、なんだとお！！！！？

「あなたのお弟子さんの中で、綾瀬さんという方がいらっしやいますよね？」

ああ、デコな。

「彼女が身につけた技、『シャイニングフングァー』は、いわば自分の魔力を敵の霊脈に叩き込み、相手の魔力や霊体に直接ダメージを叩き込む技です。」

お、お、おい、綾瀬。私はそんな技を教えてないぞ？

「このほど来襲した魔物は、いわば霊体こそが本体といえる存在。『シャイニングフングァー』の前では塵芥に等しいでしょう。」

おいおい、すげーな、流派東方 敗！！

「ですが、その上位技「爆熱ゴットフィンガー」をネギ先生が使ってワイパーを退けたという情報も・・・。」

おい、嘘だろ、おい、嘘だよなあ！？

無傷で帰ってきたのは知っているが、退けた？竜種を？



第二十四話 ゴットフィンガー（色々な意味で）（後書き）

いいかんに解説キャラのシャークティー。

美空も異次元的な別存在になってきました。

いやー、おかしいなー（笑）

## 第二十五話 エピローグ〈裏社会見学への誘い〉

### 第四部

#### 第4話 エピローグ〈裏社会見学への誘い〉

〈コノエモン

驚かされると言うよりも驚愕で神経がおかしくなるかと思った。

魔法先生や魔法生徒の巡回の隙について進入した魔族がいたことも驚きなら、それをネギ君やその手勢で鎮圧し、さらには魔族を屈服させ魔法教員に紹介してきたという手並みにも驚かされた。

シスターシャークティからの報告では、霊格段階からの心靈改造によって人間の尾魔法使いレベルにされてしまっているため、魔界にも帰れないとか。

「・・・大変ご迷惑なのはわかっておりますが、助けてください」

と泣いている姿は、絶対に魔族に見えない。

正直な話、18禁AVかという内容の戦闘映像をみても、信じられない話だが、結果かみれば魔界の情報という恐ろしい秘匿性の高い情報源を得たことになり、本国にも大きなアドバンテージを得たともいえる。

アイナ「シュイトルムシュルトの愛息子。

何という恐ろしい子供だろう。」

くアスナ

自称 梁山泊。

そこはカオスな空間になっていた。

魔法に関わって大して経っていないというのに、ユエが魔法拳士としてメキメキ実力を上げ、すでに人外技をいくつか体得していた。最近では両手で印を組むと金色に光りだしてパワーアップするのが異常に怖い。

クーフェイもその状態をみて頭痛を感じているようだった。

「あれは、伝承者がいないはずだったネ」

と言うからには、かなりレアな武術なんだろう。

どこから調べたのかと聞いてみると、図書館島で見つけた本に書いてあり、いつか体現したいと思っていたところ、ネギが一瞬だけ使っていたのをみて独学したそうだった。

なんつうか、うちの弟は「チート」だったんだろうか？

「姉さんも大概チートですよ？」

なにをおっしゃる、弟さん。

あなたの化け物具合には頭が下がりますよ、わはははは。

くマナ

最強の弟子育成計画は順調に進んでいた。

どんな武器もかわいく使いこなす姿は、出血多量になるほど愛らしいもので、わたしの携帯待ち受けになっている。

魔法も絡めた攻撃は、すでに一線に達してきているので、そろそろ裏社会の仕事をあてがっても良いのではないかと思える。

「ふむ、そろそろそういう時期か？」

「いいアルネ。」

他の師匠の了解も得られたので、私は仕事の選定を始めることにした。

ふっふっふ、かわいい姿を見せてくれよ、我が弟子よ。

第二十五話 エピローグ〈裏社会見学への誘い〉（後書き）

いやーなんとというか、ちょっと短めですが、第四部でした。

また一気に更新しますので、おたのしみに。

## 第二十六話 はんたーはんたー？（前書き）

えー、ちよつと一部方針変更します。

「五部」を書き上げるまでアップしないつもりでしたが、何時までかかるかわからないので、先にアップすることになりました。お待たせして申し訳ないです。



## 第二十六話 はんたーはんたー？

### 第五部

第1話 はんたー？はんたー？

くネギ

図書館島という施設の地下が迷路になっているのは知っていましたが、ここまでとは思いませんでした。

モンスターがでる、ゴーストがでる、倒すと報奨金がでる、装備を調えることができる、スキルが上がる。

・・・ここは本当に日本でしょうか？

ともあれ、十分な修行の成果を見せろということ、中ボスの凶<sup>ト</sup>王<sup>ホ</sup>という人を倒したところで、合格をいただきました。

攻撃的な魔法は苦手でしたが、「白き暴風」や「巨人の雷槍」を手に入れたときは、かなり嬉しくて乱発してしまい、師匠たちに怒られてしまいました。

反省しきりです。

聞けば、父様もナギ母様もここで修行したことがあるというので、もうしこしやりこんでいこうと思います。

中ボス以降の裏面にも興味がありますし、マッピングしたときの「この」穴にも興味ありますし・・・。

いけません、この修行は「はまる」と抜け出せなくなると言います。

危ないところでした。

正直に言いますと、ここの生活にどっぷり使っていたい気まんまんです。

ですが僕には魔法修行と大切な生徒おっばいを守るといふ使命があります。これは自分のダンジョン修行よりも重要で、僕の生き死になんか目じゃないほど重大なことです。

だから修行合格の時点でやめるべきですが・・・

とはいえ、一日二時間だけ潜る許可もいただきました。

・・・だつて楽しいんですもの。

### 〈師匠軍団

「こんなににも早く凶王トレボを倒すとはな・・・。」

驚きの真名とクーフェイだったが、エヴァはニヤニヤしていた。

これだけ早く終わるのなら、その先も早かるう、と。

「体術よりも魔法の方が先行してるネ。武術と銃術を中心に練り直す力？」

「いやいや、ベースが魔法使いなのだから、銃も体術も奥の手にしておいた方がいいだろう」

「奥の手だたら、もう二三手授ける力？」

「それより、今の絶抄を高める方がいいだろう」

「・・・そうネ、ちよつと焦てたアルよ。」

魔法師匠ことエヴァンジェリンは、うなずいている。

「少なくとも、今のところ必要な武力と体術はついているし、銃術は体力的に見て今が限界だろう。」

「そうだな、うん、納得だ」

「そうアルね、しばらくは武を磨く時期ネ」

では、どこで磨かせるか？

それは極めて分かりやすいところで。

「それよりも問題は綾瀬とのどかだ。」

「・・・そうだったアルね」

この二人の成長は全く予想が付かない方向性であった。

始め、のどかはアーティファクトと自分のサバイバル能力を中心に鍛えていた。

しかし、先日 of 悪魔襲来を期に、その方向性を一気に曲げた。そして加速させた。

魔法の矢を集中訓練したかと思いきや、まさかの成長を遂げ、その射程を数キロまでのばした。

加えてアーティファクト「イドの絵日記」を照準とした「ライジングアー」は龍宮ですら舌を巻く精度で、その連続射撃性の無さを補うものだった。

ではなぜそのように成長したのか？

その鍵が「綾瀬ユエ」であった。

彼女が独自に引き出した「流派東 不敗」に感化され、そして共に高めていったのだ。

彼女の持つ膨大な「無駄知識」が魔法という現実的な手段を飲み込んで、目の前を夢にしまったかのような、そんな事実だった。

「・・・あの、『石破天驚 ラブラブ ットフィンガー』は反則アルね」

そう、反則であった。

綾瀬ユエとのどこによって開発された、広域戦滅呪文は、そのタメは遙かに長いが、威力・効果共に対軍呪文としては驚異と言っているだろう。

エヴァンジェリンによる「こおるせかい」はいわば局地戦滅呪文だが、二人による広域戦滅呪文は「戦域戦滅呪文」だった。

エヴァはメガ粒子砲なら、二人はソーラレイだった。

「あれは、攻撃とかそういうもんじゃないだろ？」

「正直、どこで使えるものかすら想像もつかん。」

威力がでかい、範囲がでかい、被害がでかい。

戦力というものがどこで折り合いをつけなければならぬかを考えさせられる結果となった。

「あれのあと、二人で『やりとげた』って顔が怖かったアル」

「・・・あつちの方向に向かないよう、坊やは注意せねばならぬ」

そんなわけで、正しい魔法使い、正しい拳士、正しい銃士という修行を、真剣に語り合う三人だった。

くユエ

私の拳は壊す力です。

ネギ先生のように生み出す、愛おしむ力にいたっていないことを恥じていますが、先生はおっしゃいました。

「どんな力であろうとも、それを守る力とつかうならば誇るべき」となのですよ」と。

さすが、マスターE.U.、その心の広さは天下遍くのです。わたしもネギ先生のように、天辺を目指すのです。

「さあ、綾瀬さん。共に「愛」を生み出す力を目指しましょう。」

わかったのです。

それは力でもなく、技でもなく、愛だったのです。おろかな私はじめてその事に気付いたのです。

「ゆえ、今日の訓練は何する？」

「愛なのですよ、のどか!!」

「ふえ!?!」

そう、愛するという思い、愛するという行動が、「生み出す」力を生むのですから!!

くネギ

スイシュという武術の訓練をしていると、クー老師が一本当ててみると言い始めました。

チヨウケイという訓練に続くものだそうで、指一本触れられませんでした。

本当に残念だと思ったのですが、クー老師は言いました。

「どこにでも一本入れられれば、胸の一つでもさわらせて挙げる  
アルね。」

びーびー、ただ今警報発令しました。  
生乳許可が発令しました。

「・・・本当ですか？」  
「嘘は言わないアルよ。」

びーびー、確認が取れました、合法です!!!!  
ふはははははははははは!!!!!!

燃え上がります、ビート!! 熱く滾りますビート!! さあ、  
全力でその存在を手に!!

おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!

「ね、ネギ坊主? なんかオーラが変わったアルよ?」  
「.....」

おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!  
!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!おっばい!





このあと、クー老師のおっぱいは堪能できませんでした。  
流石に興奮しすぎて、シャットダウンしてしまった僕でした。  
残念。

第二十六話 はんたーはんたー？（後書き）

えー、ネギ君は、そのー、なんつうか、原作とかまったく気にしない方針で書かれています。

・・・ごめんなさいw

**第二十七話 会議は踊る、ネギも踊る（前書き）**

おひさしぶりの「ネギ」ですw

レビューなんかされてしまって興奮して書いてしまった安い男です。

ちょっと短めですがお楽しみいただければ幸いです。

## 第二十七話 会議は踊る、ネギも踊る

### 第五部

#### 第2話 会議は踊る、ネギも踊る

「ネギ

えー、学園祭というものをご存じでしょうか？

僕は全く知りませんでした。

なんでも学校の中でやるフェスティバルもたいなものだとか。

模擬店や研究発表をみんなで作って、楽しんで学習するという企画らしいです。

さすが日本ですね、心の底から感動しました。

そこで模擬店や研究発表の内容はどうやって決まるかということ、HRなどでクラス会議をするのですが、大いにもめています。

「ここは一つ、キャバクラで！」

「メイド喫茶しか！」

「おまちなさいっ、メイドなんて日常風景でしょ？」

「……黙るのはあんだだ！」「……」

帰りのロングホームルームでも終わらない熱き戦いです。

まるで、ふるさとの会議室を思い出します。

よりよい「乳」を求めて、自らのパッションをぶつけ合う姿に近いものを感じて、ボクは少しだけ郷愁を覚えました。

「で、どうすんだよ、この騒ぎ」

さすが千雨さん、クラス内のスタビライザーの役目が完璧です。

「そうですね、このままでは出し物が決まらないので・・・」

「ノーパン喫茶、なんてどうかしら？」

「「それだー！ー！！！！」」

どうやって介入すれば良いか判らない所で、バンと机をたたく人が現れました。

「みんな、身を削るってんなら、止めないけど、ノーパンはリスクでかいわよ」

ぐっと押し黙る皆さん。

サスガです、さすがアスナ姉さん！！

「やるならノーブラね」

ぶ、ぶはぁ・・・。。。。。

想像して一瞬意識が遠のきました。

僕のクラスの、ボクの生徒が、みんなの注目を集める？

日々、皆さんの胸には注力している関係で、最低でもワンサイズアップしている皆さんを、この研究成果を見せる、ですかぁ！？

何と恐ろしいことをお考えるのでしょうか、流石アスナ姉さんは違う。

再び成績が急落下して、筆頭バカレンジャーなどといわれているのにもかかわらず、その才能は衰えていませんでした。

あまりのことに失神寸前です。

「ま、まちなさい、アスナさん。さすがにそれはどうかと思いますわよ?」

「いいんちよ、聞きなさい。なにも全部出せって言ってるわけじゃないし、逆に厚着をするぐらいなのよ」

なるほど、それでも湧き上がる良質な形を……

「で、ウリはこれ」

アスナ姉さんが取り出したのは、三角錐のプラスチックの小物。何に使うんでしょう……?

「アスナ、てめえ、そりゃ、鋼鉄の乳首か!!」

「せいかーい」

……それ、なんです?

「あー、ほれ、ニプレスの樹脂タイプだ」

……アスナ姉さん……

「ね、ネギ先生?」

それって……

「嘘胸ですね?」

く千雨

こえー、こえーよネギ先生。

両手が光って唸ってバーサクでアスナを沈めやがった。

確かに下世話な作戦だったけど、隠すものは隠してるし、人気は  
でるから良いかなとは思ってたんだが、この後の熱い台詞で目が覚め  
た。

「皆さんが煽ろうとしているのは、情熱ではありません、劣情です  
！ 愚かな感情とはいえませんが、それでも煽られた方からしてみ  
れば、手を出してしまうのです！ 皆さんよく聞いてください、僕  
は僕の大切な生徒おっばいに対して愚かな劣情を抱かせたくありません、こ  
れは絶対です！！」

イヤー、マジ感動したわ。

確かにそうだよなあ、かわいいとおり越して「やりたい」を前に  
出させすぎだわ。

そう考えると、鋼鉄の乳首はねえわ。

つつか、それと誤解させる格好って、「やってください」と誤解  
させるって事だよなあ？

やべ、ちよっと鳥肌たってきた。

コスプレ内容も吟味しよっと。

「では、3・Aの出し物は、おばけやしきでいいですねー？」

「「「「「はい」「」「」「」

本当ならここで盛り上がるはずのクラスメイトたちだったけど、  
さっきのネギ先生恐怖と未だ復活しないで煙を吹いているアスナを  
見つつ、平坦に対応していた。

いや、委員長だけは目をきらきらさせているな。  
あいつ、何でもいいんだろ、大概。

く  
アスナ

死ぬかと思っただわよ、実際。

昔からアイナとネギって「嘘」が大嫌いだったけど、このぐらいは洒落で良いかなーと思っただめだった。

真剣に怒られて、さらにその後も説教食らってしまった。

まあ、慎みとかそういうのじゃなくて、「嘘」と「身の安全」つう話だけだったら無視したんだけど、クラスメイトの貞操なんて重い話をされると、さすがに申し訳なくなる。

あたしだのクーだのの武闘派ならまだしも、千雨ちゃんだの釘宮あたりが絡まれたらと考えて申し訳ない気持ちになった。

そこまで細かく考えているネギ、ほんとうに先生出来てるんだな  
って感心してしまった。

「ネギ、あんた良い先生なんだね」

「・・・アスナ姉さん、姉さんはよい生徒じゃないですよ？ 主に成績が」

「うるさいわねー!!」

くそー、期末で見返しちゃう。

そのためには、いいんちょを抱き込まなくちゃ・・・。



第二十七話 会議は踊る、ネギも踊る（後書き）

とりあえず、この「ネギ」は勘違い系に分類されるかもしれません

W

第二十八話 準備は順調、周田は絶叫？（前書き）

なんでしょう、こう、このネギは書きやすいなあ・・・w

## 第二十八話 準備は順調、周囲は絶叫？

### 第五部

第3話 準備は順調、周囲は絶叫？

「ネギ

教室を遊園地の一角のように変えてしまった手腕は見事なものでした。

いまから終わった後に片づけなければならないという事実がいとわしく思います。

「ネギく〜くん、てつだってえ・・・」

「おわんないよ〜」

と、内装はまだなんですが。

「お任せください、僕もこのクラスの一員なんですから」

ええ、女性ばかりに苦勞はさせません。

僕は英国紳士おっぱいへんたいですから。





のがム力つくし、加えて、どうやら世界一周の時に知り合ったらしいサークル仲間と消えるのも腹立たしい。

村の青年団の拡大版みたいなつながりが世界規模どころか魔法世界にまで広がっているのは驚いたが、今でも亭主が慕われている事実はさらに驚く。

なんとというか、男女に関わらず人気の高い亭主だ。

まあ、その点だけは誇らしい。

「ナギ、アリカ、早くいこう！」

↳ other 2

星人会は大いに沸き立った。

かの聖人<sup>セイント</sup>、アイナ<sup>アイン</sup>とルムシュルトが来日したのだから！

成田を利用して知っていることを知った我々 <sup>フランス</sup>日本支部は芸能人などが撮影されることで有名なあの場所で待ちかまえたのだが、なぜか美人の巫女さんで埋め尽くされていた。

「会長、この未来無き者達がじゃまです」

「そうだな、副長。貧しき者達がじゃまだな」

瞬間、私たちはその場から飛ぶ。

長年培った感覚が、殺気を感じたのだ。



とりあえず、三コースあるうちの一つを優先制作して前夜祭に間に合わせて、そのバックグラウンドで制作も続けるという離れ業はさすがすぎる。

提案者「ネギ」。

うちの天才さんは落ちがないわ。

とりあえず、寮までの往復時間すらケチったプールのシャワーの使用許可も取ったし、新田先生のお目こぼしも天才が通してくれたのは助かりすぎる。

交代でシャワーと仮眠をとりながら、作業を進めることで、なんとか前夜祭の朝には第一コースの制作が完了した。

ずっと監督していたネギも目の下真っ黒になっていたけど、途中で仮眠に抜けたはずなのになんで？

「あー、お祭りの警備分担会議がありました・・・」

「あー、ああ、あれ？ 私呼ばれてないけど？」

去年も呼ばれたわよね、私。

「実は、従者のみなさんははずしてもらおうよう交渉しました」

「え、ええ？ やるわよ？」

あのバイト代はおいしいのだ。

「いいえ、中学校最後の文化祭じゃないですか。思いではみなさんと深めるべきですよ」

・・・天才イ・・・

できすぎだろ、弟。

くそお、本気で手助けしなくなっちゃったじゃない。



「ネギ、先生と生徒じゃなくて、姉と弟として言うわ。もっと頼りなさい、絶対に力になれるんだから」

「そんなアスナ姉さんだからこそ頼れないんですよ？」

につこりほほえむ弟を、胸の内から燃え上がる激情のままに抱きしめたら、いいんちよにフライングヒールキックを食らってしまった。

げふう。

もぉー、姉弟のコミュニケーションをじゃまするなよぉ！

「そのうらやましい幻想をぶちこわしますわぁ！そして我が手に！！」

「いいんちよ、さぼるなぁや〜」

「これは正義です！エロエロ姉からネギ先生を守るという正義なのです！！」

「いいんちよ、さぼるなぁや〜」

「コノカさん！そういいながら刹那さんをモフモフするのはおやめなさい！！」

「せつちゃんモフモフは、うちの固有権利や〜」

あー、あれ、私もしたいかも。

んー、でもネギモフもいいかも。

モフモフ〜

〜ネギ

最近の荒れた生活のせいで肌艶は悪いですが、バランスと栄養を欠かしていませんのでアスナ姉さんの胸は万全です。

ただ、ストレスのせいか、いいんちよさんの胸が型くずれしているみたいです。

どうにかしないといけませんね。

そうだ、いいんちよさんのところのメイドさんに協力を仰ぎましよう。

うん、よし、がんばるぞ！

僕の生徒のために！！

第二十八話 準備は順調、周田は絶叫？（後書き）

私の執筆環境で「生徒」と入れると「生徒おっほい」と表示されます。

・・・人前で「生徒」と入力できませんw

第二十九話 「既知」との遭遇（前書き）

おひさしぶりの紳士小説です！

## 第二十九話 「既知」との遭遇

### 第五部

#### 第4話 「既知」との遭遇

「アイナ

随分と久しぶりにやってきた麻帆良。

何もかもが懐かしい。

ナギやアリカは一度春に來ているんだけど、僕は本当に久しぶりだった。

そう、魔法世界に旅立つ前に修行させてもらった、それ以來だから。

あの時もお祭りがやっていて、そのときの武闘大会でナギが優勝したり、屋台売上コンテストに飛び入りして特別賞を僕がもらった。りした。

本当に、いい思い出だ。

青春時代っていうものをこの学園都市が味あわせてくれたんだと思つと、感謝してもしきれない。

それはナギも同じらしく、少し瞳が潤んでいる。

「あー、なんかよ、この前と違って感傷的だぜ」

「ん？ そんなのか、相棒」

「ああ、あの世界に行く前に修行した土地だし、アイナを試しちまった場所だしな」

「……ああ、あの「一緒に、魔法世界に行ってくれないか」ですか？

「……ああ。思い出すだけでも恥ずかしい話だよ。アイナと一緒に居てくれるのは間違いないのに、あの頃は不安で仕方なかったんだよ」

「真っ赤になって苦笑いのナギ。  
何時までも可愛い奥さんだと思います。」

「ふむ、そういう思い出が少ないのは不利ではないか」

「なら、今回一緒に作りましょう、アリカ」

「……ならばいい」

「につこり微笑むアリカと、にやりと笑うナギの手を取り僕たちは妖怪大将の部屋に向かった。」

く  
アスナ

「なにかしら、すごい嫌な予感がするんだけど。」

「思わず周囲を見回すと、一緒に準備をしていた仮装ネギが小首をかしげた。」

「姉さん、どうしました？」

「……なーんか、私の危機意識をわきたてるのよねえ」

そう、胸の奥がざわめくというか、米神がチリチリするっていうか。

「あら、アスナさん、どうかしまして？」

「あ、いいんちよ。んー、なんか嫌な予感がするのよね」

「おほほほ、さすが野生児アスナさん。年上好きの業は深いですね」

「あのね、いいんちよ。あたしは「アイナ」が好きなんであって、年上すきってワケじゃないわよ」

「ですが、そのアイナさんはネギ先生のお父様なんでしょう？ 立派な叔父様すきですわ」

いいんちよには、私とネギが直接的に血が繋がっていないくて、養女だという事を話している。

「あー、まあ、そのへんのニアンスの違いは、直接見ないとわからないわよね」

「あはははは、まあ、そうかもしれません」

私もネギも苦笑い。

まあ、自分の父親が「どう見ても美少女にしか見えません」なんて説明できないし。

「……は!？」

そ、そうか、それしかないか！

「……どうしました、姉さん」

「……この嫌な予感の正体がわかったわ」

そう、それは!!

「ほほー？ 嫌な予感の正体とやらを聞きたいのお。なあ、相棒」

「そうだなあ、その予感の詳細を聞こうじゃないか、なあ、相棒」

で、でたー！ー！！！！

「ナギ母様、アリカ母様！！」

ナイス、弟！

そのまま拘束してくれ！

私はこのまま・・・

「久しぶりだね、アスナ」

「・・・アイナ」

目の前に現れた養父に心を再び奪われる。

「大きくなったね」

ゆるりと広げられた両腕に抱きしめられて、私の心はとろけた。

だって仕方ないじゃない！

初恋で未だ続く憧れなんだから！！

「あ、あ、あ、アスナさん？」

あ、衝撃を受けてるクラスメイトの中で、いんちよが再起動した。

「こ、こ、このかたが、アイナさんですか？」



「うん、アイナ＝シユトルムシユルト」

いいんちよのことも紹介すると、優雅な身のこなしでアイナも挨拶した。

「アスナとネギのお父さんです。よろしく」

「……おとうさん……!?」「……」

絶叫がクラスどころか廊下まで響きわたる。

まあ、そうよね。

一目見ただけじゃ、単なる超美少女だし。

く  
アイナ

さすが息子。

彼のクラスの女子は順調に手を加えられつつも美しい進歩を見せていた。

それは植木の枝うちのようにであり、盆栽のようでもある。

アスナですら整えられた感があるのがすばらしい。

うんうん、幼い頃からの英才教育は間違っていないませんでしたね。

「あ、あ、あ、あの！ 本当に『お父様』ですか?」

雪広あやかさん、の言葉に僕がうなずくと、再び絶叫。

なぜかどこでも聞かれますけど、ネギは僕の息子ですよ。

ナギがお腹を痛めて生みました。

「あはははは、ま、アイナの見た目じゃ仕方ないだろ？」  
「そうだな、アイナ。仕方ないな」

愛する妻たちの言葉は痛かったけど、そういう評価は他人がするものだし、努力ではどうにもならないところもあつたりするのがかない。

「いやーすごいっすね、できればネギ先生と奥さんたちとでスナップ撮らせてもらっていいですか？」

ああ、君は朝倉さんだったね。

「え？ ご存じでしたか？」

「クラスのみなさんはネギの手紙でよく知ってますよ」

胸の形状から弾力、そして理想形態とその変遷まで。

「うっわー、なんか光栄ですね！」

「こちらも光栄ですよ」

なにしろ、あらゆるタイプの胸の雛形こひなばかりじゃないですか！

正直、この環境は僕もうらやましい限りです。

ナギやアリカオッパイの胸を守り育てるのも嬉しいですが、この環境もまた……。

そんなこんなで僕たち家族のスナップを撮った朝倉さんは、臨時号外を！と走ってゆきました。

## 第二十九話 「既知」との遭遇（後書き）

えー、次話用のネタが唸っているので、近日中にアップしますw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0393m/>

---

紅き翼～乙女だらけの大戦争～

2011年12月11日02時33分発行